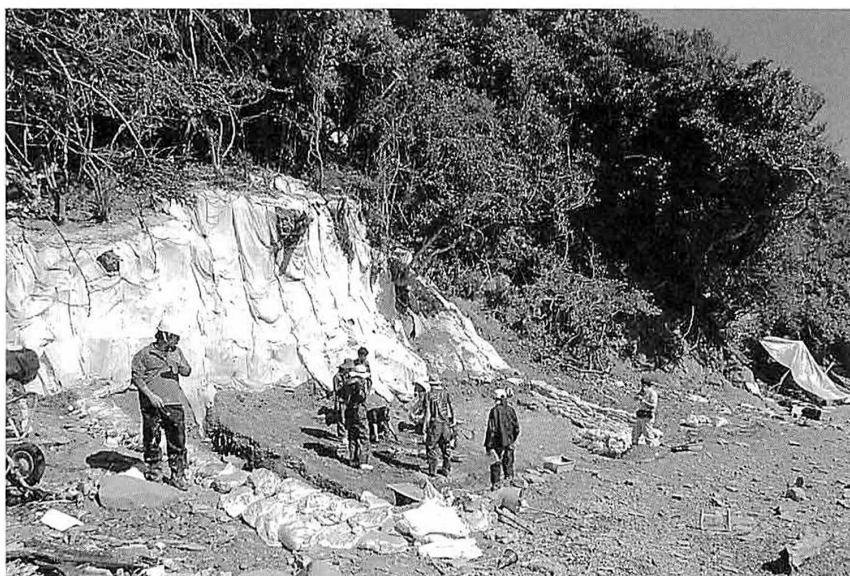


# 第1部 越高遺跡調査報告



2017/9/14

## 一 位置と環境

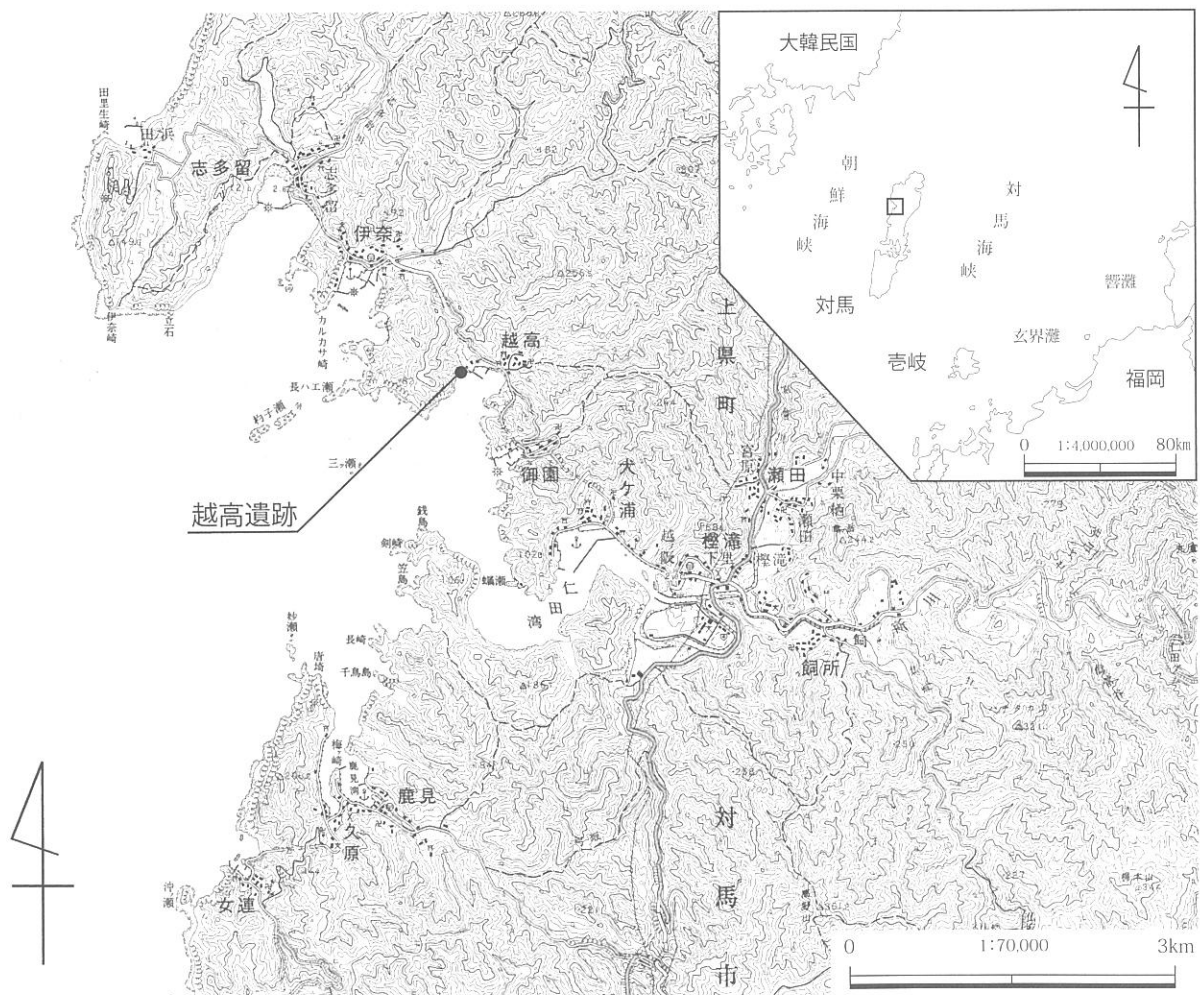
### 1. 対馬の地理的環境と越高遺跡の立地

#### (1) 対馬の環境

対馬の位置と地形（第1図） 対馬は、九州本土と朝鮮半島の上に位置する長崎県の離島であり、北方の上島、南方の下島、および周辺の諸島から構成されている。北緯34度5分～34度42分、東経129度10分～129度30分に位置し、総面積は708.65km<sup>2</sup>である。対馬から福岡県まで約150km、朝鮮半島まで約50kmと、九州本土より朝鮮半島に近いので、「国境の島」とも呼ばれている。

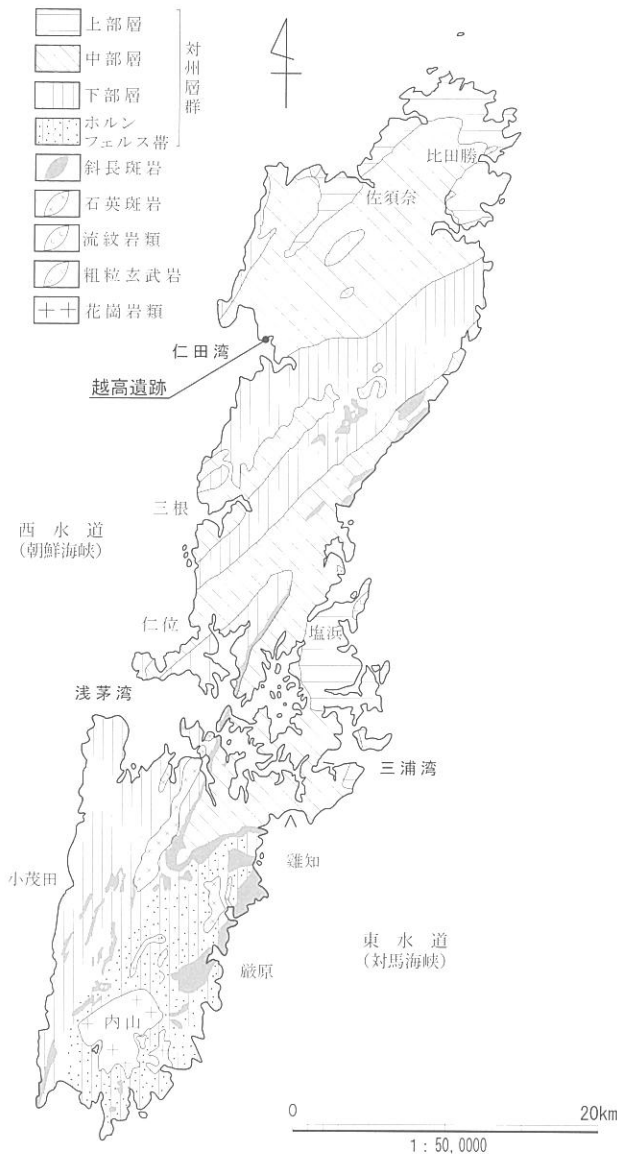
対馬の陸地の9割は山地である。標高は全体的にみると南方が高く、北方が低い傾向にあり、下島の<sup>やたてやま</sup>矢立山が最高峰（標高648m）となっている。島の南北をはしる分水嶺は、島の中心からやや東に片寄っており、西側の傾斜は緩やかで、東側は急傾斜となっている。このため、東海岸には沖積地はほとんど形成されない。一方、西海岸には沖積地がわずかにあるものの、河口に低地は発達していない。

対馬の海岸は、沈降リアス式海岸と断層海岸の2種類に分けることができる。沈降リアス式海岸は



第1図 越高遺跡位置図

一 位置と環境



第2図 対馬の地質図 (高橋 1992) を一部改変

浅茅湾や豊<sup>あそ</sup>一帯<sup>とよ</sup>にみられ、脚の長い入江の谷間に小集落が営まれることが多い。そのため、現在の集落と同じ地点から遺跡が多く確認されている。断層海岸は西海岸の棹崎<sup>さおざき</sup>—田里生崎<sup>たりのうざき</sup>、中央部の御崎<sup>みさき</sup>—豆殿崎<sup>まめどのさき</sup>、東海岸の舟志<sup>しゅうし</sup>—佐賀間<sup>さか</sup>に顕著にみられる。

**対馬の地質と環境** 対馬は、主に対州層群と呼ばれる新生代第三紀の頁岩と砂岩で構成されている (第2図)。この層の厚さは6 km以上に達する。頁岩や砂岩は浸透や風化に対する抵抗力が弱く、流水性が高いという特性がある。そのため対馬は耕地に適さず、飲料水に乏しい。この対州層群の風化により生じた細長い小礫が、越高遺跡の堆積層中に大量に含まれていた。対州層群の中には一部火成岩がみられ、この火成岩が対州層群に貫入することで山地が形成されている。

対馬海峡は、九州本土と朝鮮半島の間であり、海峡の中央に位置する対馬を境にして東水道と西水道に分かれる。対馬海峡には暖流である対馬海流が流れているため、対馬の冬は比較的温暖で、夏の気温上昇も少ない。対馬の年平均気温は14℃～15℃で、1月の平均気温は5.7℃、8月の平均気温は26.4℃である。

対馬の植生は、イスノキ、シイなどが主体となっている。分布は限られているが、ヒトツバタゴやモクゲンジなども自生している。また対

馬には、日本本土と朝鮮半島それぞれの特徴をあわせもつ固有生物種が存在し、ツシマヤマネコ、ツシマジカ、ツシマテン、ツシマウラボシシジミ、ツシマカブリモドキなどが生息する。

(2) 越高遺跡の位置と立地 (第1図)

上県町<sup>かみあがた</sup>越高<sup>かいびこ</sup>は町内を流れる飼所川と仁田川が合流する河口付近に位置する。越高遺跡は、越高集落から南西に約500 m離れた場所にある。遺跡はA・Bの2つの地点から構成されている。遺跡は仁田湾に面しているため、偏西風や波浪の侵食による影響を受けやすい環境下にある。 (齋藤)

## 2. 対馬の歴史的環境

### (1) 対馬の原始・古代

**縄文時代** 対馬において旧石器時代の遺跡は現在のところ確認されておらず、遺跡が確認されるのは縄文時代早期末からである。縄文時代の遺跡の多くは西海岸に分布し、湾奥の岩礁性海岸近くの平坦地に立地している。

縄文時代早期末から前期にかけての遺跡は、上県町越高に所在する越高遺跡がある。この遺跡からは縄文土器のほか、多数の朝鮮半島系の隆起文土器が出土している。石器は、石鏃が出土している。対馬ではこの時期にはすでに朝鮮半島との交流が行われていたことがわかる。

縄文時代前期から中期にかけての遺跡は、上県町久原くばらに所在する夫婦石遺跡めおとしがある。この遺跡からは曾畑式や阿高式といった縄文土器や朝鮮半島系の土器が出土しており、縄文土器は少量で朝鮮半島系の櫛目文土器が大部分を占めている。石器は、石鏃や石斧が出土している。

縄文時代中期から後期にかけての遺跡は、峰町佐賀に所在する佐賀貝塚がある。この遺跡からは離頭銜や結合式釣針といった多数の骨角器が出土している。また対馬の周辺海域には存在しないサルアワビ、ユキノカサといった貝類のほかに朝鮮半島系の短斜線文土器が出土している。

縄文時代晩期の遺跡は、峰町吉田に所在する吉田遺跡がある。この遺跡からは、縄文土器、朝鮮半島系の二重口縁土器や沈線文土器が出土している。

**弥生時代** 弥生時代における対馬の集落遺跡はほとんど確認されておらず、埋葬遺跡が中心になっている。水田関連遺構や石包丁の出土がほとんどなく、稲作に関する実態は明らかになっていない。また、縄文時代と比較すると朝鮮半島系の土器が少ない。

弥生時代前期の遺跡は、峰町三根に所在する井手遺跡がある。この遺跡からは板付式といった弥生土器のほかに朝鮮半島系の孔列文土器が出土している。

弥生時代中期の遺跡は、峰町吉田に所在する恵比須山遺跡がある。この遺跡では弥生時代中期から古墳時代にかけてつくられた箱式石棺が12基確認されている。同時期の対馬では箱式石棺墓を中心とする埋葬遺跡が多くみられる。

弥生時代後期の遺跡は、上対馬町古里に所在する塔の首遺跡がある。この遺跡からも箱式石棺が確認されており、棺の内外から朝鮮半島系の青銅製円環型釧や大陸系の方格規矩文鏡、北部九州系の広形銅矛などの遺物が出土している。対馬は同じ時代の他地域の遺跡に比べても、朝鮮半島系や北部九州系の青銅器の保有率が高い。(岩熊)

**古墳時代** 古墳時代の埋葬遺跡は対馬全島に分布している。特に下島東岸地域の雞知浦けちを中心とした一帯に、古墳が多く築造されている。対馬の古墳は、山や海岸の礫石を利用したものが主流である。

古墳時代前期の古墳は、上県町志多留に所在する大將軍山古墳がある。墳丘は確認されておらず、箱式石棺を主体部としている。副葬品は土師器、陶質土器、鳳鏡、鉄鏃、玉類が出土している。

古墳時代中期の古墳は、美津島町雞知でいづかに所在する出居塚古墳がある。全長約40mの前方後方墳で、柳葉形銅鏃が出土している。このことから畿内勢力と結びついていた首長層の古墳と考えられている。

古墳時代後期の古墳は、美津島町雞知に所在する根曾古墳群がある。その中でも2号墳は全長約36mの前方後円墳で、土師器、須恵器、鉄刀片が出土している。

古墳時代終末期の古墳は、巖原町下原に所在する矢立山古墳群がある。3基の方墳が確認されてお

り、1号墳からは金銅装大刀の鞘口や責金具、須恵器の破片が、2号墳からは須恵器、銅鏡、刀装具が出土している。

**古代以降** 対馬は外交の要所として朝鮮半島や東アジア地域と中央政権を結びつける役割を担った。

飛鳥時代、大和朝廷が白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗れると、対馬の浅茅湾の一角に朝鮮式山城である金田城が築かれた。金田城は城壁が約2kmを囲むほど巨大で、唐や新羅からの侵攻に備えるための堅固で重要な山城であった。金田城からは土師器、須恵器、陶質土器、瓦質土器が出土している。

平安時代、女真族が対馬を襲った事件（刀伊の入寇）をきっかけに朝廷と高麗が関係をもち、11世紀後半頃から両国の間で貿易が行われ始めた。特に鎌倉時代になってから活発な交流があり、対馬は当時の両国間の貿易の拠点となった。このことは、同時期の遺跡である上県町屋敷畑に所在する大石原遺跡において朝鮮半島の高麗青磁が多く出土していることからわかる。また、室町時代に明との貿易も行われ、美津島町尾崎に所在する水崎遺跡からは、当時の輸入陶磁器が多く出土している。この輸入陶磁器の中でも朝鮮王朝陶磁の占める割合が高いこと、他の遺跡と比べて東南アジア産陶磁器の出土数が多いことが水崎遺跡の特徴として挙げられる。

戦国時代、対馬を治めていた宗氏は厳原町今屋敷に金石城を建て、そこを居城としていた。金石城からは瓦や国産の陶磁器が出土している。朝鮮半島との交流は、安土桃山時代終わりに起こった豊臣秀吉の朝鮮出兵によって一時は断絶されるものの、江戸時代に入ると朝鮮半島との貿易に支えられていた対馬は国交回復に努めた。そして対馬藩の大名宗氏と家臣らの努力によって国交は回復し、貿易を再開させた。また、宗氏は古代から防衛の要の位置にあった厳原町棧原に城を建て、金石城から棧原城に移城した。海沿いにある棧原城は朝鮮通信使を受け入れるために築城された城である。棧原城からは朝鮮王朝陶磁が多数出土している。対馬は日本と朝鮮半島の結節点としての役割を持っていた。

(中野)

## (2) 対馬における遺跡立地の変遷

対馬は南北に険しい山地が走り、山林の面積が全島の約9割を占めている。そのため、対馬の遺跡は海岸部に立地する傾向にある。

縄文時代の遺跡数は少なく、時期ごとに立地の変遷を検討することは難しい。これまでに確認された遺跡は海に面した平地に立地している。集落遺跡では島外との交流を示す遺物も出土している。上島西海岸には早期から前期の遺跡が多い。これらの遺跡では朝鮮半島系の土器がほぼ主体をなし、縄文土器は少ない。対して、上島中南部には後期の遺跡が多い。これらの遺跡では朝鮮半島系の土器は少なく、縄文土器が多量に出土している。

弥生時代の遺跡は集落遺跡がほとんど確認されておらず、埋葬遺跡が主である。埋葬遺跡は岬の先端や海を臨む丘陵上に立地する。その多くが箱式石棺墓で、北部九州で見られる支石墓は対馬では確認されていない。この立地の様相は、古墳時代まで続く。弥生時代は、縄文時代より朝鮮半島系の遺物が少なく、九州本土からもたらされた遺物が多い。前期から中期前半は遺跡が少なく、立地の変遷はつかみにくい。中期後半から後期前半にかけては上島南部の峰町三根地区と豊玉町佐保浦・仁位地区に青銅器が出土する埋葬遺跡が集中する。青銅器の大半は朝鮮半島系のものである。確認された遺跡数は少ないが、上島北部でも青銅器が副葬された箱式石棺が見ついている。遺跡数、副葬品を考慮すると、三根地区や佐保浦・仁位地区が当時の対馬の中心的な地域であったと考えられる。後期後半から終末期になると、三根地区では多数の副葬品は見られなくなる。一方、佐保浦・仁位地区にお

いては副葬品の種類や数が豊富な状態が続く。よって、遺跡分布の中心は佐保浦・仁位地区に移ったと考えられる。また、遺跡の分布が下島に拡大し、後期後半には下島でも箱式石棺墓が築かれるようになる。浅茅湾岸地域で九州本土系の青銅器を多数副葬した箱式石棺墓が確認されており、雞知地区が下島において遺跡分布の中心をなしたことがわかる。

古墳時代にも埋葬遺跡が多く、立地の様相は弥生時代と変わらない。中期になると雞知地区では、根曾古墳群の1号墳に代表されるような前方後円墳が築造される。後期から終末期になると下島南部において古墳の分布が広がり、下島南岸にも終末期古墳が築造されるようになる。雞知地区は終末期まで継続して古墳が築造され続けている。そのため、古墳時代を通して対馬の中心的な地域であったと考えられる。

古代になると、朝鮮式山城である金田城の築城や国府の設置など下島に中央政権の施設が集中する。特に巖原では、中世に宗氏の居館が、近世に金石城などの城郭が築かれた。以降、巖原は現代に至るまで対馬の中心的な地域として機能している。

以上をまとめると、対馬では、縄文時代早期から前期は朝鮮半島との交流を示す遺跡が上島西海岸に集中するが、後期には朝鮮半島との交流が低調化し、九州本土との交流を示す遺跡が上島中南部に集中する。弥生時代は箱式石棺が集中する上島南部が対馬の中心的な地域であった。古墳時代になると下島に多く古墳が築造されており、下島が中心的な地域となる。遺跡の分布からみて対馬の中心的な地域は上島の三根、佐保浦・仁位、下島の雞知、巖原と時代が下るとともに南下する。朝鮮半島との交流が衰退し、九州本土との交流が活発になるにつれ、対馬の中心的な地域は上島から下島に変遷していったと考えられる。

(宮浦)

#### 引用・参考文献

- 荒井登志夫 2007『対馬・老岐史を辿る—古代日本の政治経済文化の探求1—』歴史研：pp.13-18
- 岡田勝幸・豊永結花里編 2017『考古学研究室報告』第52集 熊本大学文学部考古学研究室
- 小田富士雄 1984「対馬・老岐の古墳文化」『日本古代史講座』第2巻 学生社：pp.109-130
- 尾上博一 2003「老岐・対馬および長崎の古墳の様相」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会：pp.27-94
- 古門雅高編 1996『大石原遺跡』上県町文化財報告 第1集 上県町教育委員会
- 坂田邦洋 1975「志多留貝塚」『対馬の考古学』縄文文化研究会：pp.95-185
- 正林護 1986「対馬東岸の縄文時代遺跡」『えとのす』第30号 新日本教育図書：pp.45-53
- 正林護 1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書 第9集 長崎県峰町教育委員会
- 正林護 1995『ながさき古代紀行 vol. 1 対馬』タウンニュース社
- 瀬野精一郎ほか 1998『長崎県の歴史』山川出版社
- 副島和明 1992『長崎県埋蔵文化財調査集報 XV』長崎県文化財調査報告書 第104集 長崎県教育委員会
- 高倉洋彰 1986「弥生時代の対馬とその社会」『えとのす』第30号 新日本教育図書：pp.38-44
- 高野晋司編 1994『金石城』長崎県巖原町文化財調査報告書 第3集 巖原町教育委員会
- 高野晋司 2005『日本海城歴史体系』第1巻 清文堂
- 高橋清 1992「対馬地域」『九州地方』日本の地質9 共立出版：pp.120-123
- 田中淳也編 2011『金田城跡IV』対馬市埋蔵文化財調査報告書 第6集 対馬市教育委員会
- 田中聡一・古澤義久 2013「境界付近における関係の実像 韓半島と九州」『季刊 考古学』第125号 雄山閣：pp.79-84
- 長崎県教育委員会 1974『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書 第17集 長崎県教育委員会
- 長崎県教育委員会 1994『長崎県遺跡地区—対馬地区—』長崎県文化財調査報告書 第118集 長崎県教育委員会
- 長崎県考古協会 1995『長崎県の考古学』長崎県労働金庫
- 外山幹夫 1996『図説 長崎県の歴史』河出書房新社：pp.18～32
- 福田一志編 1999『水崎遺跡』美津島町文化財調査報告書 第8集 美津島町教育委員会
- 福田一志編 1997『棧原城跡調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第138集 長崎県教育委員会
- 藤田和祐 1998「対馬の古墳文化」『原始・古代の長崎県』通史編 長崎県教育委員会：pp.521-525
- 古澤義久 2013「土器の類似性と搬入品 九州と韓半島」『季刊 考古学』第125号 雄山閣：pp.66-70
- 古澤義久 2014「玄海灘島嶼域を中心にした縄文時代日韓土器交流の性格」『東京大学考古学研究室研究紀要』第28号 東京大学文学部考古学研究室：pp.27-80
- 宮本一夫編 2004『対馬古田遺跡—縄文時代遺跡の発掘調査—』九州大学大学院人文科学研究科考古学研究室

## 二 越高遺跡の調査

### 1. 調査経過

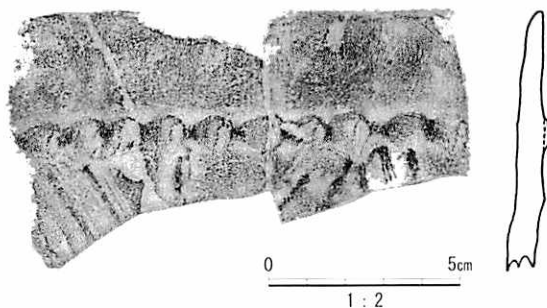
#### (1) 既往の調査

越高遺跡は対馬郷土研究会によって発見された。契機となったのは第3図の隆起文土器である。本資料は、1970年に九州大学による対馬2次調査時に木村幾多郎氏により実測されたものである。木村氏は、越高遺跡で採集された土器に刻目のある横隆帯と細隆起線が施文されている点に注目し、東三洞貝塚出土土器との類似性を指摘した(西・木村1974)。その後坂田邦洋氏を中心として発掘調査(第1・2次)が実施され、本遺跡は隆起文土器を中心とする朝鮮半島系の土器が多数出土する遺跡として注目されるようになった。

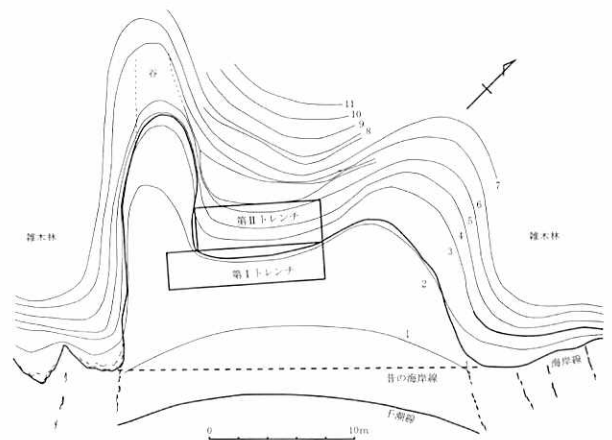
第1次調査は越高遺跡B地点(当時、越高遺跡と呼称)を対象とし、1976年12月11日～17日の日程で行われた。調査主体は、上県町教育委員会と長崎大学医学部解剖学第二教室である。調査区は、海岸部崖面の前に第Iトレンチ、傾斜地に第IIトレンチが設定された(第4図)。調査の結果、第IIトレンチでは地表下1～3mにかけて良好な遺物包含層が確認され(第5図)、包含層から朝鮮半島系の隆起文土器を主体とする多数の遺物が出土している。縄文土器は、前平式土器が7点出土したと報告されている。石器は、石鏃、石槍、石匙、削器、石斧、石核などが出土している。また出土位置は不明だが、土壙墓が2基検出されたと報告されている(坂田1978)。

第2次調査は越高遺跡A地点(当時、越高尾崎遺跡と呼称)を対象とし、1978年7月16日～22日の日程で行われた。調査主体は、上県町教育委員会であり、調査目的は隆起文土器の編年を明確にすることであった。調査区は、崖面東寄りの遺物包含層が露出した場所に設定された(第6図)。調査の結果、縄文時代早期から前期に相当する6枚の遺物包含層が確認された(第7図)。この調査では縄文土器と隆起文土器の併行関係が確認され、上層では縄文土器が、下層では隆起文土器が多く出土するという傾向が指摘された。また遺構として、第2層から2基、第4層から1基の炉跡(第8図)が報告されている(坂田1979)。

その後約20年を経て、遺跡が海水の侵食にさらされ、第2次調査から海岸部の地形がかなり後退



第3図 越高遺跡で採集された土器(木村氏実測)



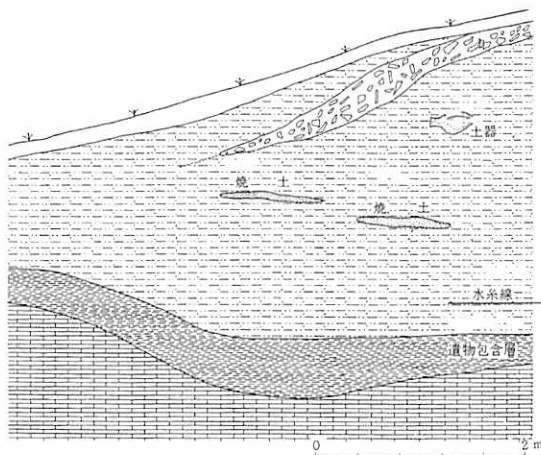
第4図 第1次調査 調査区位置図(坂田1978)

していることが確認された。遺跡が消滅段階にあるとの危惧から、遺跡の範囲を確認するために長崎県による第3次調査が行われた。越高遺跡（当時、越高浜遺跡と呼称）A・B地点を対象とし、1996年8月26日～9月13日の日程で行われた。長崎県教育庁文化課を主体に、上県町教育委員会の協力を得て行われ、調査区はA地点に3箇所、B地点に2箇所設定された。第3～5調査区において、隆起文土器や沈線文土器の出土が報告されている。しかし波浪の影響や包含層が深いなどの点から、十分に調査が行われなかったため、遺跡の範囲は依然不明のままに終わっている（東・福田1998）。

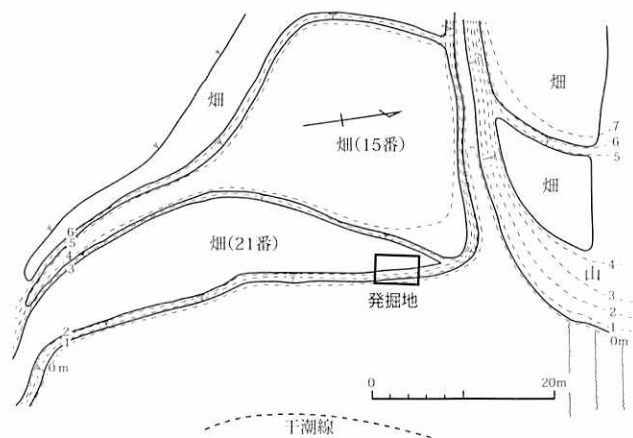
このように、越高遺跡は日韓新石器時代の交流史を考える上できわめて重要であるにも関わらず、その規模も性格も判然としない状況であった。その後も台風などによる波浪の影響で遺跡が破壊されつつあるとの情報があり、発掘調査による実態解明が喫緊の課題とされた。そこで熊本大学文学部考古学研究室は対馬市教育委員会と合議し、共同で本遺跡の残存状況を探るため発掘調査を行うことにした。

第4次調査は、熊本大学文学部考古学研究室と対馬市教育委員会を調査主体とし、遺物包含層の堆積状況の確認のために、2015年8月16日～24日の日程で実施した。調査区はA・B両地点の海岸部と谷部の崖面に1箇所ずつ、計4箇所を設定した。調査方法は崖の表面をわずかに削り、遺物包含層の残存状況を確認するというものであった。その結果、遺物包含層はA・B両地点に良好に残っていることを確認できた。A地点では海岸部調査区において、第2次調査と概ね一致する土層堆積状況を確認したが、遺物の出土がなかったため、各層の時期比定はできなかった。谷部調査区においては、隆起文土器や石器を含む遺物包含層を確認し、遺跡の範囲が北西部に広がる可能性が高まった。B地点では、海岸部調査区と谷部調査区で複数の遺物包含層を確認し、特に6層（第5次調査の第4層に相当）においては隆起文土器を含む遺物が多数出土した。6層は、第1次調査における遺物包含層に相当するものと推定されたが、第1次調査で検出された遺物包含層直下の岩盤は、6層下では確認できなかった（山元2016）。

第5次調査は、越高遺跡B地点を対象とし、2016年9月11日～22日の日程で実施した。調査主体は、熊本大学文学部考古学研究室と対馬市教育委員会である。調査目的は、第4次調査で不明瞭であった層序の把握と、第1次調査において遺物包含層直下より検出された岩盤の確認であった。調査区は、海岸部崖面と谷部崖面の2箇所を設定した。調査の結果、海岸部と谷部の層序に対応関係がみられることが明らかになった。最終的に5枚の堆積層を確認した。遺物は第3～5層で出土し、土器、石器、



第5図 第1次調査 土層断面図（坂田1978）



第6図 第2次調査 調査区位置図（坂田1979）



炭化物であった。土器は、その多くが朝鮮半島の新石器時代にみられる隆起文土器である。土器の垂直的な出土集中部と型式差、それらに伴う放射性炭素年代値などから、二時期に分かれることが明らかになった。石器は石鏃、スクレイパー、砥石、敲石などが出土している。しかし、第4・5次調査でも、第1・2次調査で検出された埋葬跡や炉跡などの遺構は全く検出されなかった。さらに徳島大学西山賢一氏による調査では、遺物包含層そのものが崖錐性堆積物であるとの地質学的所見から、遺跡が二次堆積物によるものである可能性も否定できない。遺跡の性格はもとより成因すらよく分からない状況であった(岡田・豊永 2017)。(齋藤)

(2) 今回の調査(第6次調査)

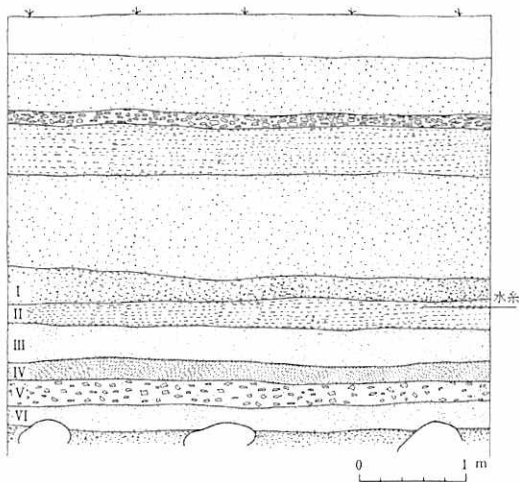
その後、B地点において対馬市教育委員会による追加調査(2016年10月3日～10月20日)が実施され、第5次調査の海岸部の地表下1mの部分から第5層相当層の遺物包含層が確認され、そこから第5次調査の第4層出土土器とはほぼ同じ様相の土器(第21図)が発見された。

この結果を受け、遺跡の規模や広がり、成因の究明のためには、B地点における継続調査が必要である点、A地点においても遺物の出土が谷部だけでなく海岸部からも見られる点、遺跡や包含層の広がりがまだ明確になっていない点などから、対馬市教育委員会と合議し、両地点における継続調査(第6次)を行うこととした。

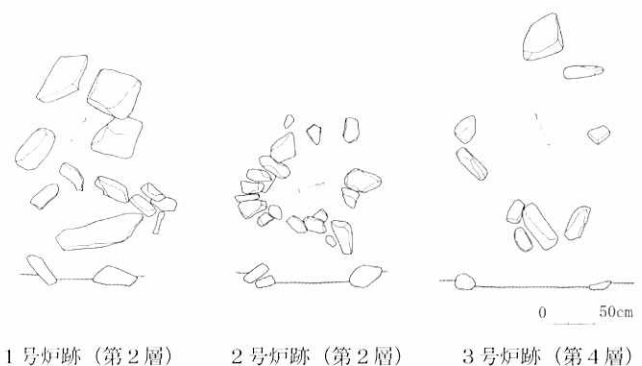
調査は越高遺跡A・B地点(第9図)を対象に、2017年9月9日～21日までの13日間実施した。調査区はA・B地点にそれぞれ1箇所設定した。測量調査はA・B地点でそれぞれ行った(第1表)。

A地点では第4次調査崖面から海岸への遺物包含層の広がり確認を目的とした。調査区は南北方向に長辺を取る形で、第4次調査と同一地点の崖下に設定した。調査の結果、遺物包含層が海岸へ広がることを確認し、炉跡を検出することができた。測量は、調査区崖上の斜面及び段畑として利用されていた平坦部を中心に行った。第2次調査時の測量図との比較から、今回の調査区との位置関係を推定した(第10図)。

B地点では、下層の遺物包含層の平面的、垂直的な広がり確認と岩盤の検出を目的とし、調査区は東西方向に長辺を取る形で、第5次調査と同一地点の崖下にやや広めに設定した。測量は、第5次調査で未測量であった斜面上側の平坦部を中心に行った。調査の結果、遺物包含層が海岸に面的に広がること、調査区東側に岩盤が露出し、西側の岩盤を合わせたその地勢から、遺跡が対州層群の岩盤割れ目(谷地形)に層位的な堆積をして形成されたことが判明した。(廣重)



第7図 第2次調査 土層断面図(坂田1979)



第8図 第2次調査 検出炉跡図(坂田1979)



第9図 越高遺跡A・B地点位置図

第1表 越高遺跡基準点座標一覧（局地座標）

| 基準点名    | X座標 (m) | Y座標 (m) | Z座標 (m) | 備考          |
|---------|---------|---------|---------|-------------|
| KT16-10 | 27.194  | -3.279  | 18.747  | (第13図)      |
| KT16-11 | 1.231   | -0.511  | 3.897   | (第13図)      |
| KT16-12 | 2.928   | 24.601  | 3.400   | (第13図)      |
| KT16-13 | -3.347  | 43.932  | -       | (第9図)       |
| KT16-14 | -12.520 | 38.575  | -       | (第9図)       |
| KT16-15 | -15.910 | 39.946  | 1.973   | K4を改称(第10図) |
| KT16-16 | -12.822 | -53.827 | 6.446   | (第10図)      |
| KT16-17 | -8.522  | -58.404 | 6.824   | (第10図)      |
| KT16-18 | -0.787  | -66.161 | 8.137   | (第10図)      |
| KT16-19 | -0.993  | -60.682 | -       | (第10図)      |
| KT16-20 | 1.589   | -62.944 | -       | (第10図)      |
| KT16-21 | -2.218  | -48.234 | 8.910   | (第10図)      |
| KT16-22 | -0.168  | -51.850 | 10.287  | (第10図)      |
| KT16-23 | 7.394   | -47.276 | 11.800  | (第9図)       |

## 2. 越高遺跡A地点

### (1) 調査区の設定 (第10図)

越高遺跡A地点は越高遺跡B地点から南西約60mの地点に位置する。A地点は海岸沿いに高さ3mほどの崖面が続いている。満潮時には海水面が崖面ぎりぎりまで迫り、第5次調査時よりも侵食がすすんでいた。この崖面が遺物包含層であることは、第4次調査で確認している。

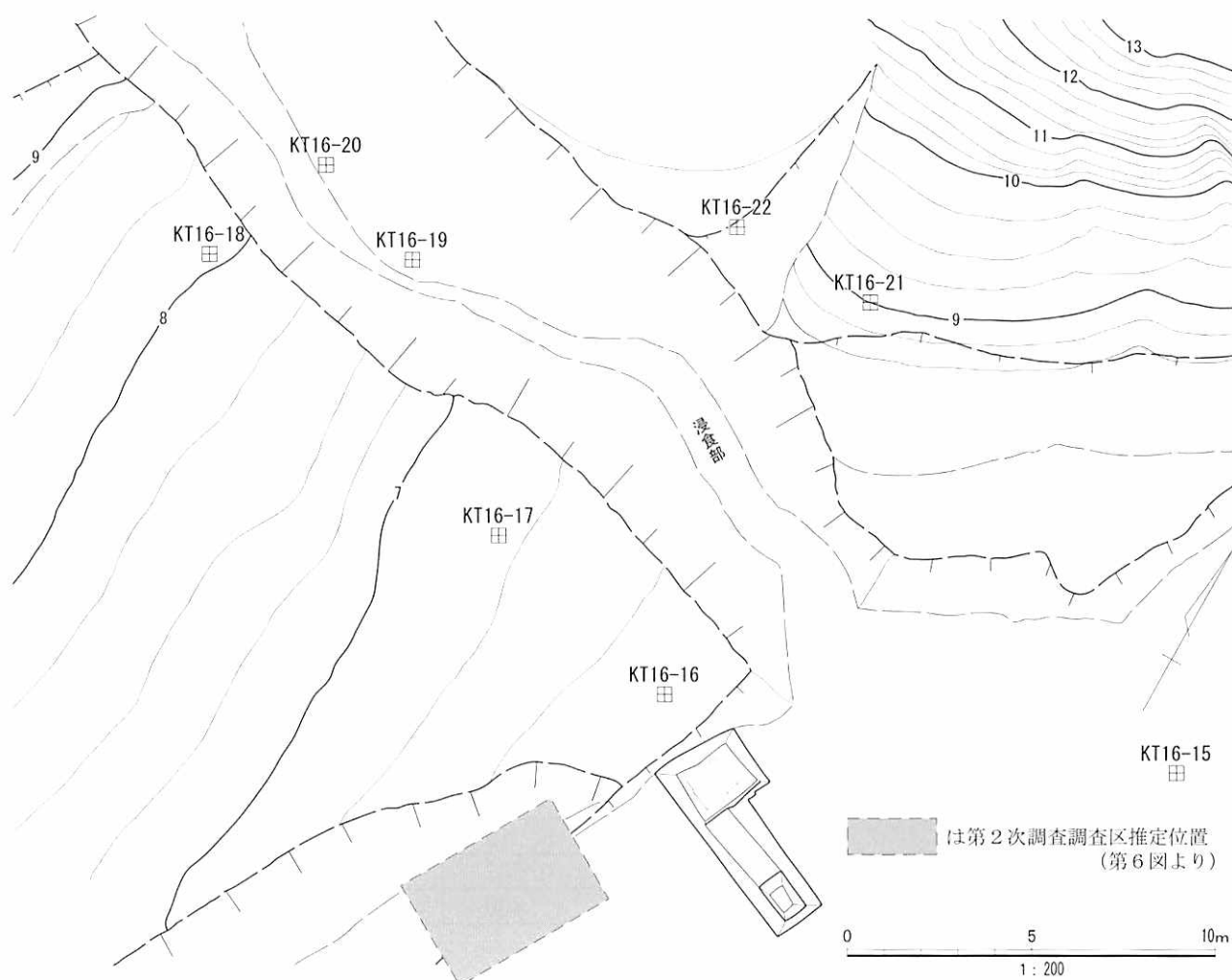
今回の調査では、崖下の様子と海岸への遺物包含層の広がりを観察するために、第4次調査海岸部調査区崖面の直下に南北1m、東西4mの調査区を設け、包含層のひろがりを確認した。また調査区東側では一部を深く掘り下げ、遺物の出土状況や土層の堆積状況の観察を行った。

その結果、調査区西側の崖面直下で炉跡の一部を確認したため、調査区を崖面から東に1m、北に0.5m拡張し、炉跡の全容を把握した。

なお、第2次調査で設定された調査区は今回の調査区南端から崖面に沿って南へ約2mの位置に設定されたと考えられる。

### (2) 遺跡の層序 (第11・12図)

今回の調査では、11枚の土層を確認することができた。第1層と第2層は調査区西壁でのみ、第



第10図 A地点測量図

3層と第4層は調査区南壁でのみ確認できた。

第1層は黄褐色の混礫土層である。礫の大きさは約7cmである。しまりはやや悪い。また第1層は、第4次調査の8層と対応すると考えられる。

第2層は厚さ約0.4～0.7mの黄褐色の混礫土層である。礫の大きさは約2cmで、しまりはやや悪い。

第3層は攪乱である。崖面の土が崩落し、再堆積したものであると考えられる。しまりは悪い。

第4層は厚さ約0.4～0.5mの砂利層である。波による再堆積であると考えられる。しまりは悪い。

第5層は厚さ約0.2mの褐色の混礫土層である。礫の大きさは約3～4cmであり、間に細かい砂粒がつかまっている。しまりはやや悪い。

第6層は厚さ約0.4～0.5mの黄褐色の混礫粘土層である。礫の大きさは約2～3cmであり、礫が密集している。しまりはやや良い。

第7層は厚さ約0.2～0.4mの褐色の砂礫土層である。しまりはやや良い。

第8層は厚さ約0.2～0.4mの暗赤褐色の砂礫粘土層である。礫の大きさは、約2～3cmであり、しまりはやや良い。炉跡はこの層で検出した。炉跡についての詳細は出土遺構の項で述べる。

第9層は厚さ約0.4mで、黄褐色の砂質シルト層である。礫が混じっており、礫の大きさは約6～7cmである。しまりはやや悪い。大礫が見られ、第2次調査で人頭大の円礫が混じると報告された層に相当する可能性がある。

第10層は厚さ約0.3mの赤褐色のシルト層である。しまりはやや悪い。約2～3cmの角礫が混じっている。海水が流入していることにより、詳細は確認できなかった。

第11層は褐色のシルト層である。しまりはやや悪い。第10層同様に海水の流入により詳細は確認できなかった。

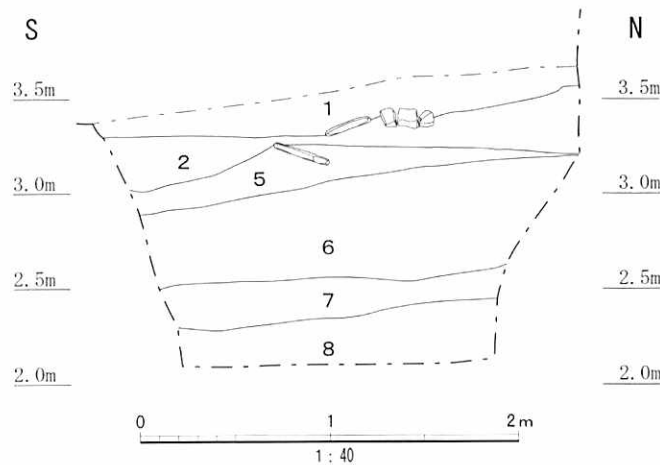
第1・2・5～11層が自然堆積層であり、第3・4層が再堆積による層であると考えられる。

なお、今回確認した層位は、出土土器の様相や第9層から大礫を確認していることから、第8層が第2次調査の第6層、第9層が第2次調査で人頭大の円礫が出土している層に比定できると考えられる。また、比高差から第1・2層は第2次調査の第1・2層に比定できるものと考えられる。

### (3) 遺物出土状況

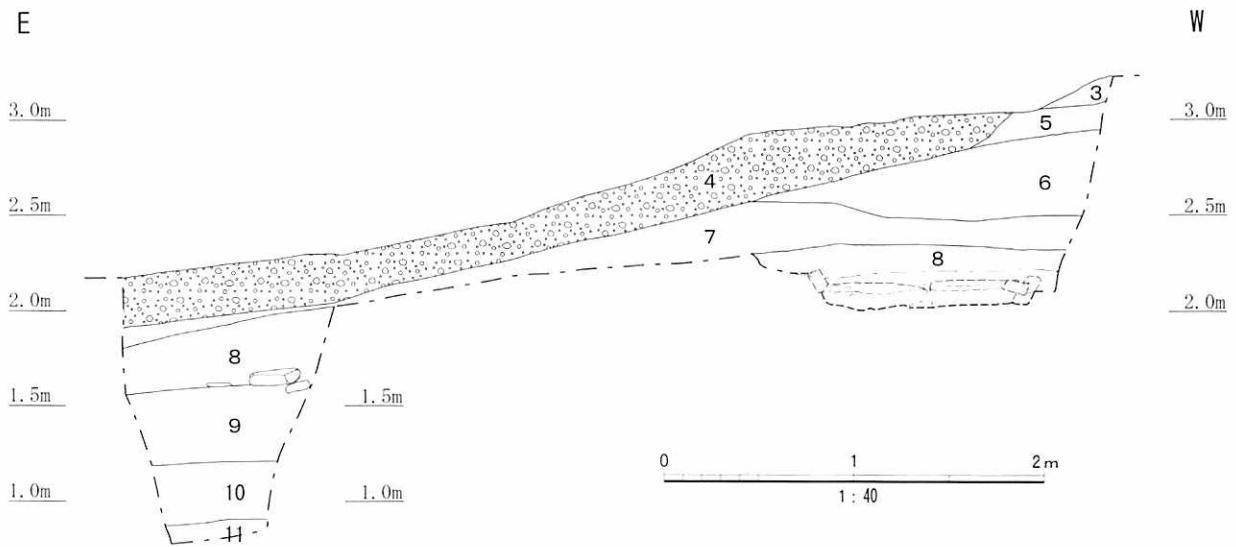
遺物は第6～10層で出土した。出土した遺物は土器136点、石器51点、炭化物26点である。内訳は、第6層から土器4点、石器39点、第7層から土器11点、石器2点、炭化物1点、第8層から土器73点、石器2点、炭化物18点、骨片、第9層から土器7点、石器1点、骨片、第10層から土器2点、炭化物1点である。第8層の遺構内からは土器33点、炭化物16点、骨片が出土した。第11層は、海水の流入により遺物の有無が確認できなかった。

遺構周辺と調査区中央部から遺物がまとまって出土した。遺構周辺からは土器27点、炭化物15点、骨片が出土した。炭化物は、放射性炭素年代測定法（AMS法）を用いて分析を行った。調査区中央部では特に第7層から集中して遺物が出土した。また崖面直下の第6層からは39点の黒曜石が出土した。出土した土器の大半は朝鮮半島の新石器時代にみられる隆起文土器であった。 (赤峯)



- |              |               |                             |
|--------------|---------------|-----------------------------|
| 1. 黄褐色混礫土層   | (Hue10YR4/3)  | 約7cmの礫を含む。しまりはやや悪い。         |
| 2. 黄褐色混礫土層   | (Hue10YR5/4)  | 約2cmの礫を含む。しまりはやや悪い。         |
| 5. 褐色混礫土層    | (Hue10YR4/4)  | 約3～4cmの礫を含む。しまりはやや悪い。       |
| 6. 黄褐色混礫粘土層  | (Hue10YR4/3)  | 約2～3cmの礫を含む。しまりはやや良い。粘性が強い。 |
| 7. 褐色砂礫土層    | (Hue7.5YR4/4) | 極細粒である。しまりはやや良い。粘性がやや強い。    |
| 8. 暗赤褐色砂礫粘土層 | (Hue5YR3/3)   | 約2～3cmの礫を含む。しまりはやや良い。       |

第11図 A地点調査区西壁土層断面図



- |              |               |                             |
|--------------|---------------|-----------------------------|
| 3. 攪乱        |               |                             |
| 4. 砂利層       |               |                             |
| 5. 褐色混礫土層    | (Hue10YR4/4)  | 約3～4cmの礫を含む。しまりはやや悪い。       |
| 6. 黄褐色混礫粘土層  | (Hue10YR4/3)  | 約2～3cmの礫を含む。しまりはやや良い。粘性は強い。 |
| 7. 褐色砂礫土層    | (Hue7.5YR4/4) | 極細粒である。しまりはやや良い。粘性がやや強い。    |
| 8. 暗赤褐色砂礫粘土層 | (Hue5YR3/3)   | 約2～3cmの礫を含む。しまりはやや良い。       |
| 9. 黄褐色砂質シルト層 | (Hue10YR5/6)  | 約6～7cmの礫を含む。しまりはやや悪い。       |
| 10. 赤褐色シルト層  | (Hue5YR4/3)   | 約2～3cmの礫を含む。しまりはやや悪い。       |
| 11. 褐色シルト層   | (Hue10YR4/6)  | しまりはやや悪い。粘性は強い。             |

第12図 A地点調査区南壁土層断面図

### 3. 越高遺跡B地点

#### (1) 調査区の設定 (第13図)

越高遺跡B地点は崖面が露出しており、南東部の浜辺は角礫で構成されている。この崖面は第5次調査において、遺物包含層であることを確認した。崖下の地表面には漂着物が大量に混じっており、それらを除去するために現地表面を掘削した後、発掘調査を行った。第5次追加調査で、海岸部にも遺物包含層が広がることを確認されている。

今回の調査では、遺物包含層の面的な広がりとして第1次調査で検出された岩盤の確認を目的として調査区を設定した。なおこれは、第5次調査における海岸部調査区とほぼ同一地点で、やや範囲を広げ、南北7.5m、東西11.5mとした。

掘削の結果、調査区西側において南北6.3m、東西1.3mの攪乱を確認した(A)。これは覆土から第5次追加調査の調査区と推定される。さらに、調査区南側に南北0.5m、東西4.5mの攪乱部分を確認した(B)。その位置からみて第3次調査の第4調査区と推定される。

調査区は遺物や土層を確認しつつ人力で深さ0.2mほど掘削した。

#### (2) 遺跡の層序 (第14・15図)

今回の調査では2枚の土層を確認することができた。上位の層はその色調、しまりから第5次調査における第5層に相当する。よって今回の調査の層序を第5次調査の層序に準拠する。なお、トレンチ(A)南側の第5層上位において、堆積層を切った波浪による二次堆積の攪乱が確認できた。

第5層は厚さ約0.4～0.5mの褐色の混礫砂層である。礫の大きさは約2～3cmで、大礫も含まれている。しまりはやや悪い。

第6層は褐色の混礫土層である。重機で掘削したが、層の下面まで到達できなかった。層の厚さは2m以上あると思われる。礫の大きさは約2～3cmであり、第5層との違いはないが、薄く平たい礫が多い。しまりはやや悪い。

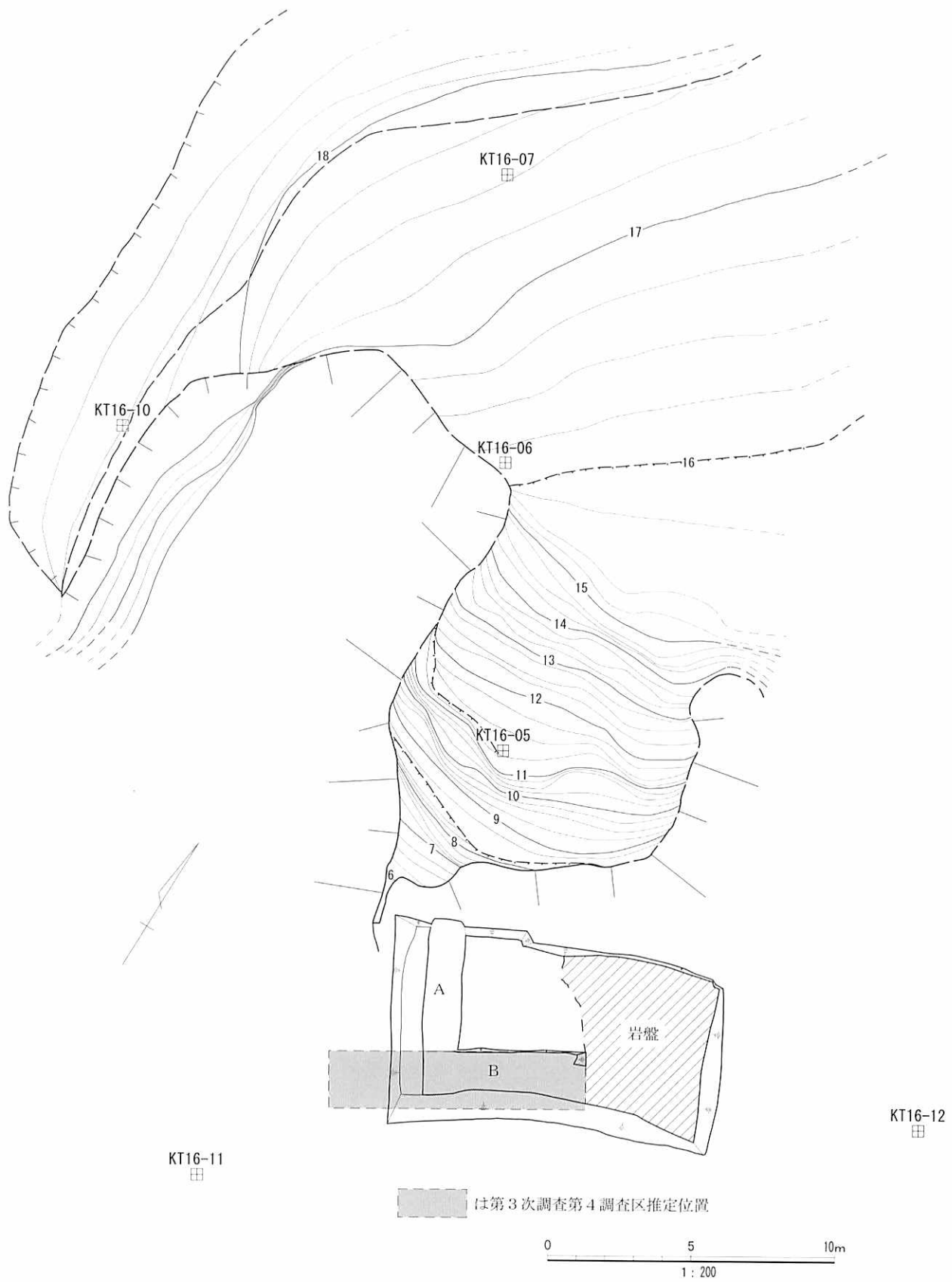
調査区東側は、第5層の堆積がほとんどなく、岩盤上面を確認した。調査区西側の崖面にも岩盤が確認できるため、この部分は岩盤を基層とした本来谷地形であったと考えられる。

#### (3) 遺物出土状況

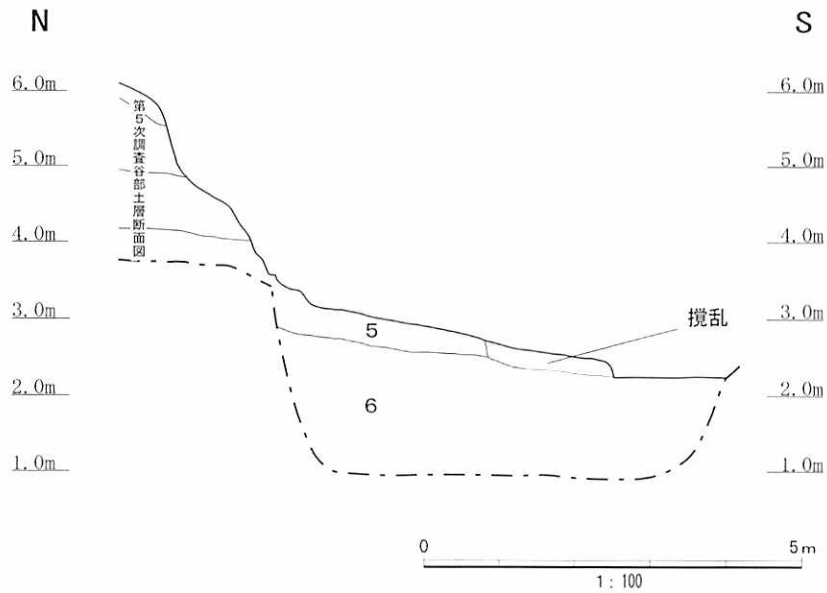
遺物は第5層から出土した。出土した遺物は土器118点、石器15点、炭化物16点、骨片4点である。炭化物は、放射性炭素年代測定法(AMS法)を用いて分析を行った。

特に調査区北西部から遺物がまとまって出土した。第5次調査海岸部の土器出土集中部直下の調査区内では、遺物の出土は少なかった。出土した土器の大半は朝鮮半島の新石器時代にみられる隆起文土器であった。

(小堀)

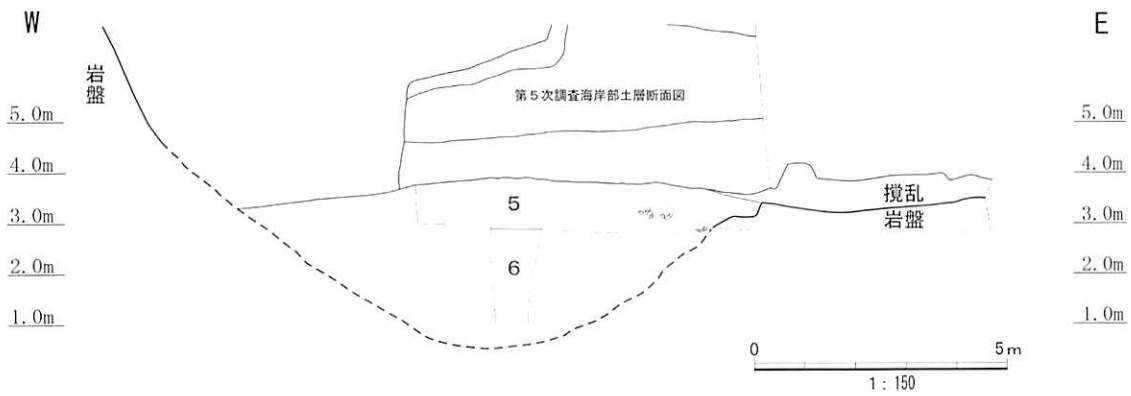


第13図 B地点測量図



- 5. 褐色混礫砂層 (Hue10YR4/4) 約2～3cmの礫を含む。しまりはやや悪い。
- 6. 褐色混礫土層 (Hue10YR4/6) 約2～3cmの礫を含む。しまりはやや悪い。

第14図 B地点トレンチ(A)東壁土層断面図



- 5. 褐色混礫砂層 (Hue10YR4/4) 約2～3cmの礫を含む。しまりはやや悪い。
- 6. 褐色混礫土層 (Hue10YR4/6) 約2～3cmの礫を含む。しまりはやや悪い。

第15図 B地点調査区北壁土層断面模式図 (破線は岩盤の推定ライン)



## 4. 出土遺構

### (1) 遺構の性格

今回の調査では、A地点から炉跡を1基確認した(第16図)。

炉跡は調査区西側の第8層下面で検出した。検出した炉跡の底面の標高は約2mである。各辺に2つずつ砂岩製の板状の石を配置し、南北約1.1m、東西約1.1mの方形をなしている。石はいずれも長さ約50cm、高さ約15cm、厚さ約5～15cmである。石はわずかに外側に開いている。遺構の上面から深さ20cmを掘り下げ、石の下端まで検出した。炉跡の底面は地面をそのまま用い、平らであった。底面からは焼土を確認した。また、覆土及び底面から遺物が出土した。

以上のように規格性のある砂岩製の板石で区画されており、その内部から焼土や遺物を確認していることから、この遺構を炉跡と判断した。またこの周辺に他の遺構は確認できず、屋外に置かれたものと考えられる。

なお、遺構土層断面図に関しては、炉跡を覆う層は第6層と第7層で、分層を行っていない。炉跡は第8層に属するものであり、第6・7層は上層に堆積している。

### (2) 出土遺物

遺構からは、土器と炭化物、骨片が出土した。遺構内で出土した土器は第17図に示した。

土器は33点出土した。いずれの土器も文様は確認できなかった。また小片であるため器形も不明である。詳細は出土土器の項で述べる。土器の大半は炉跡の南東部から集中して出土した。

炭化物は16点出土した。放射性炭素年代測定法(AMS法)を用いて分析を行った。

骨片も炉跡の中から多数確認できたが、小片であり原形を留めていなかったことから同定はできなかった。骨片は炉跡全体から出土している。

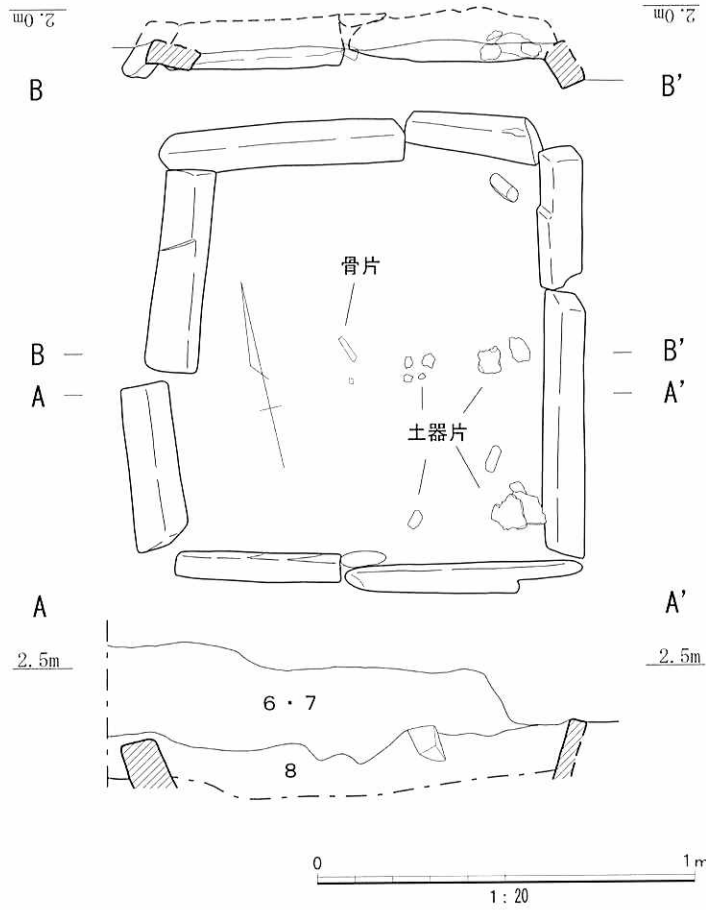
### (3) 遺構の時期

遺構内から出土した炭化物の分析による放射性炭素年代値は、 $1\sigma$  暦年代範囲で4964-4899 cal BC(測定試料名:PLD-35606)である。調査区東側の第8層の年代値も4934-4848 cal BC(測定試料名:NSTK-54A)を示し、第8層は層の堆積に大きな乱れがないと想定できる。また、第10層出土炭化物の年代値が5168-5076 cal BC(測定試料名:NSTK-100A)なので、第10層と第8層に安定した層位的な堆積をしているといえる。よって遺構周辺に攪乱は無く、安定した土層の層位的な堆積状況を示していると判断できる。

炉内部から出土した土器は、いずれも文様が確認できないことから時期の比定は難しい。しかし、炉の属する第8層と上下層である第7・9層から隆起文土器が出土している。このことから炉は、隆起文土器が使われる時期である、朝鮮半島の新石器時代前期と併行する時期のものと考えられる。

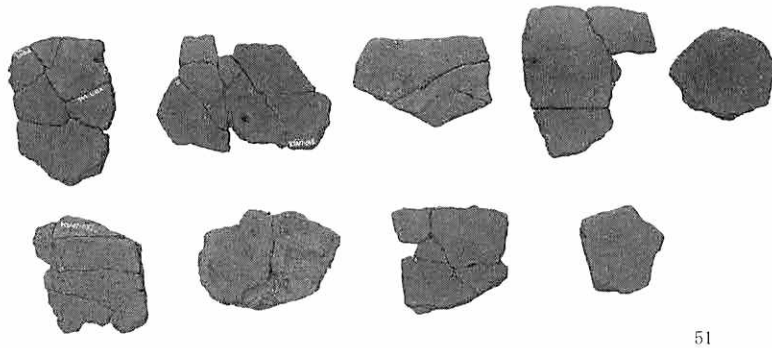
なお越高遺跡では、第2次調査で炉跡がA地点から3基出土したと報告されている(第8図)が詳細は不明である。いずれも円礫を間隔を開けて配置し、直径約1mの円形をなしており、炉内では遺物は出土していないとされる。今回の調査で出土した遺構とは様相が異なるため、検討が必要である。

今回の調査で検出したものと類似した炉跡は、朝鮮半島の韓国釜山市に所在する東三洞貝塚<sup>ゴムバン</sup>や凡方貝塚で確認されている。いずれも平らな石を方形に組み、地面を炉の床にそのまま使用する屋外の炉である。東三洞貝塚で検出された炉は1辺が約0.6mの板状の石を方形に配している。凡方遺跡で検出された炉は、規格性の低い石を長方形に組み、1辺が約1m、もう1辺が約0.5mである。(赤峯)



- 6・7. 黄褐色混礫粘土層 (Hue10YR4/3) 約2～3cmの礫を含む。しまりはやや良い。  
 8. 暗赤褐色砂礫粘土層 (Hue5YR3/3) しまりはやや良い。焼土を含む。  
 (第6・7層は分層を行っていない。)

第16図 A地点出土遺構平面・立面・土層断面図



51

第17図 遺構内出土土器

## 5. 出土遺物

### (1) 土器 (第17～21図)

今回の調査では、総計254点の土器が出土した。図示した資料は92点である。ほとんどの土器が朝鮮半島系の特徴を有する土器である。その多くが朝鮮半島南海岸地域で出土している隆起文土器である。

隆起文土器には、隆帯文、隆起線文、刺突文、沈線文、豆粒文の5種類の文様がある。これらの文様は、単独で施文される場合と複合して施文される場合がある。しかし出土資料は小片が多いため文様構成が明確ではないものも多い。

#### 〈A地点〉

A地点では136点の土器が出土した。このうち文様や条痕があるものと底部を50点図示した。以下、図示した遺物について述べる。

**隆帯文土器** (2、12、13、15、16、17、18) 7点図示した。層位別にみると、第6層1点、第7層1点、第8層2点、第10層1点、層位不明2点である。隆帯文は口縁部に対して平行に1～数条施文されているものを基本とする。隆帯文の刻目は、刻目の形状により指によるものと工具によるものに分類した。

12、13、15は指による隆帯文が施文されている。2、17、18は工具による隆帯文が施文されている。16は摩滅が著しく、隆帯文の施文具を特定できなかった。

**隆起線文土器** (1、5、20、21) 4点図示した。層位別にみると、第8層2点、第9層1点、層位不明1点である。隆起線文は口縁部に対して平行に、1～数条施文されているものを基本とし、斜位や縦位に施文されているものもある。

5、21は幅の細い隆起線文が斜位に、5は4条、21は2条施文されている。

**刺突文土器** (4、26) 2点図示した。層位別にみると、層位不明2点である。

4は口縁部が垂直に立ち上がる鉢であると考えられる。口唇部は丸くおさめられている。刺突文が、確認できる器面全面に散布的に施文されている。刺突文は列状をなすと考えられるが、全容は不明である。26は刺突文が横位に1条施文されている。刺突文は直線ではなく、波状を呈する。

**沈線文土器** (6、7、8、9、10、11、23、50) 8点図示した。層位別にみると、第6層1点、第7層1点、第8層3点、層位不明3点である。沈線文は口縁部に対して平行だけでなく、縦位や斜位、格子状に施文されており、他の文様の土器と比べ多様である。しかしすべて胴部小片であるため、他の文様と複合している可能性もある。

6、10は沈線文が斜位に施文されている。7は沈線文が斜位に2条、間隔をあけて施文されている。8、9は工具による沈線文が縦位に施文されている。8の沈線文は他の個体と比べて幅が広く、篋のような工具で施文されたと考えられる。9は内面にユビオサエが明瞭に残る。11、23は沈線文が格子状に施文されている。50は沈線文が斜位に2条施文されている。器面に強いナデのあとが残っており、外面は滑らかである。器壁が非常に薄い点、胎土に含まれる鋳物の量が少ない点より、50は隆起文土器ではないと考えられる。

**複合文土器** (3、14、19、22、24、25) 6点図示した。層位別にみると、第7層1点、第8層4点、第9層1点である。文様の複合は、隆帯文と豆粒文、隆帯文と沈線文、隆起線文と刺突文、刺突文と

沈線文、刺突文と豆粒文の5種類が確認された。

3は器壁が非常に屈曲しており、壺の頸部であると考えられる。刺突文が2条施文されており、豆粒文が2箇所張り付けられている。豆粒文上にも刺突文が施文されている。14は他の個体と比べ、器壁が厚い。隆帯文の切れ目部分に豆粒文の張り付けが確認される。19は隆帯文が1条と、その下部に沈線文が縦位に3条施文されている。22は隆起線文上が口縁部に対し平行に1条と、斜位に1条施文されている。このうち横位の隆起線文には刺突文が1箇所施文されている。24は沈線文が斜位に2条と、その間に刺突文が2箇所施文されており、下部の沈線文に重なるようにしてさらに2条の沈線文が施文されている。25は沈線文が斜位に2条と、これらの間に刺突文が施文されている。山形区画の内部に刺突文が施文された文様構成ではないかと考えられる。

**条痕** (27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41) 15点図示した。層位別にみると、第6層2点、第8層2点、第9層1点、層位不明10点である。小片であるため全体の様相は不明であるが、条痕で調整された土器である。

27、35、36、37、38、39、40、41、は内外面が条痕で調整されている。28、29、30、31、32、33は外面が条痕で調整されている。33は口唇部が丸くおさめられている。34は内面が条痕で調整されている。

**底部** (42、43、44、45、46、47、48、49) 底部は8点を図示している。層位別にみると、7層1点、8層1点、9層4点、10層1点、層位不明1点である。全て平底である。45は内面に赤色顔料が付着している。

**無文土器** (51、第17図) 炉内から出土した土器である。33点出土した。層位は第8層である。土器の大半は炉内の南東部から集中して出土した。小片であるため器形は不明である。色調は明るく、内外面をナデで調整されている。胎土の色調から同一個体と考えられるが、接合はできなかった。

## まとめ

土器は第6層～第10層で出土した。条痕で調整された土器は、大部分が層位不明であるものの、比較的上位の層に多く確認される。隆起線文土器は主に第8層と第9層に確認され、沈線文土器は第6層～第8層で確認された。これにより隆起線文土器よりも、沈線文土器のほうが新しい様相を示すと考えられる。複合文土器は第8層でのみ確認された。隆帯文土器は第6～第10層のすべてで確認された。

## 〈B地点〉

B地点では118点の土器が出土した。文様や条痕が確認されるものと底部を24点図示した。以下、図示した遺物について述べる。文様の分類はA地点による。

**隆帯文土器** (52、54、57、58、59、60、61、62、63、64、65、66) 12点図示した。層位別にみると、第5層7点、層位不明5点である。隆帯文は口縁部に対して平行に1～数条施文されているものを基本とし、斜位や縦位に施文されているものもある。

52、58、61は指による隆帯文が施文されている。52と61は口縁部である。61は口縁部はやや外反する。隆帯文が1条とその下部に斜位に5条施文されている。横位の隆帯文には途切れている部分があり、隆帯文は器面を一周していないと考えられる。54、57、59、60、62、63、64、65、66は工具による隆帯文が施文されている。このうち54、57、59、60、62は口縁部である。54の隆帯文は刻目の間隔が密である。内面だけでなく口縁部にもユビオサエが残る。57は器壁が口縁に向かい内側へ湾曲する鉢形と考えられる。59は隆帯文が2条施文されており、その間は斜位の隆帯文で山形

に区画されている。刻目は間隔が密である。60は口唇部が丸くおさまられている。隆帯文が2条と、その間に斜位と縦位に2条ずつ施文されている。65は幅の狭い隆帯が1条施文されている。

**隆起線文土器** (55、67) 2点図示した。層位別にみると、第5層1点、層位不明1点である。

55は隆起線文が2条施文されている。67はほぼ摩滅しているものの、隆起線文が1条施文されている。

**刺突文土器** (56、68) 2点図示した。層位別にみると、層位不明2点である。

56、68は口縁部である。56は器壁が大きく湾曲しており、口縁部が外反する器形であると考えられる。口縁下に平行に刺突文が2条施文されている。68の口唇部が丸くおさまられている。口縁部に対して平行に刺突文が1条施文されている。

**沈線文土器** (69) 1点図示した。層位は層位不明1点である。

69は沈線文が斜位に4条施文されている。内面は条痕で調整されている。

**複合文土器** (53) 1点図示した。層位は第5層1点である。文様の複合は、隆帯文と隆起線文が確認された。

53は口縁部で、指による隆帯文の下部に隆起線文が施文されている。

**条痕** (70、71、72) 3点図示した。層位別にみると、第5層2点、層位不明1点である。

71、72は内外面が条痕で調整されている。70は内外面に深い条痕が施されており、外面は横位に施されているが内面は横位と斜位の2方向に施されている。これらの特徴から、70は隆起文土器ではないと考えられる。

**底部** (73、74、75) 底部は3点図示している。層位別にみると、第5層2点、層位不明1点である。全て平底である。

### 第5次追加調査の出土遺物

第5次追加調査は対馬市教育委員会が行なったものである。この調査地点は今回の調査のB地点トレンチ(A)に相当する。

9点図示した。層位は今回の調査の第5層に相当する。

**隆帯文土器** (76、78、79、80、81) 5点図示した。76は隆帯文が1条施文されている。78、79、80、81は工具による隆帯文が1条施文されている。

**複合文土器** (77、82、83、84) 4点図示した。77は工具による隆帯文が1条施文されている。口縁部には刻目が施されている。82と83、84は胎土や文様構成から、同一個体と考えられる。82・83・84は隆帯文が3条、その下部に隆起線文が1条施文され、以下隆帯文と隆起線文が1条ずつ交互に施文されている。

### まとめ

B地点では、隆帯文土器、隆起線文土器、刺突文土器、沈線文土器、複合文土器、条痕で調整された土器がすべて第5層から出土した。個体数は隆帯文土器が最も多い。ほとんどの土器が文様や文様構成から同時期のものと考えられるが、56や68、69、70は様相が異なるものと考えられる。(三浦)

### (2) 石器

今回の調査では、総計66点の石器が出土した。図示した資料は8点である。

#### 〈A地点〉

A地点では51点の石器が出土した。層位別に見ると、第6層39点、第7層2点、第8層2点、第9層1点、層位不明7点である。図示したものの以外は全て黒曜石の剥片、碎片である。以下、図示し

た遺物について述べる。

**石斧** 1は頁岩製の打製石斧である。第8層から出土した。表面は自然面の残る部分が多く、刃部は欠けた後に加工されている。裏面は全体に粗い加工が見られる。また両側面は磨いて加工されている。基部と表面刃部が欠損している。

**敲石** 2は砂岩製の敲石である。表面の中央部、左側面、下端に使用痕が見られる。石器の半分は欠損している。

**凹石** 3は砂岩製の凹石である。表面の中央部に使用痕が見られる。裏面の下半部に滑らかな部分がある。

#### 〈B地点〉

B地点では15点の石器が出土した。層位別に見ると、第5層11点、層位不明4点である。黒曜石製の石器や剥片が9点出土している。以下、図示した遺物について述べる。

**石鏃** 4、5は黒曜石製の石鏃である。両者とも第5層から出土した。4は全体に丁寧な調整加工が施されており、二等辺三角形を呈する。5は両面に細かい調整が見られる。他の部分に比べ、基部右側の調整が最も新しいことから、欠けた後に調整を施したと考えられる。先端部が欠損している。

**敲石** 6は砂岩製の敲石である。第5層から出土した。上端、下端、両面の中央部に使用痕が見られる。また、長辺の両側面には2箇所ずつ、くぼみが見られる。

**剥片** 7-①、7-②は頁岩製の剥片で、両者とも第5層から出土した。7-①が剥出された後に、7-②が剥出されたものである。両者とも表面の上端に加工が見られる。

#### (3) その他

今回の調査では、土器、石器の他に炭化物と骨片が出土した。

#### 〈A地点〉

**炭化物** A地点では26点出土した。そのうち、遺構内から出土した炭化物は16点であった。なお、土器付着の炭化物、第8層出土の炭化物に関して放射性炭素年代測定法（AMS法）を用いて分析を行った。

**骨片** A地点では遺構内から多数出土しているが、小片で状態も悪く、種の同定はできない。

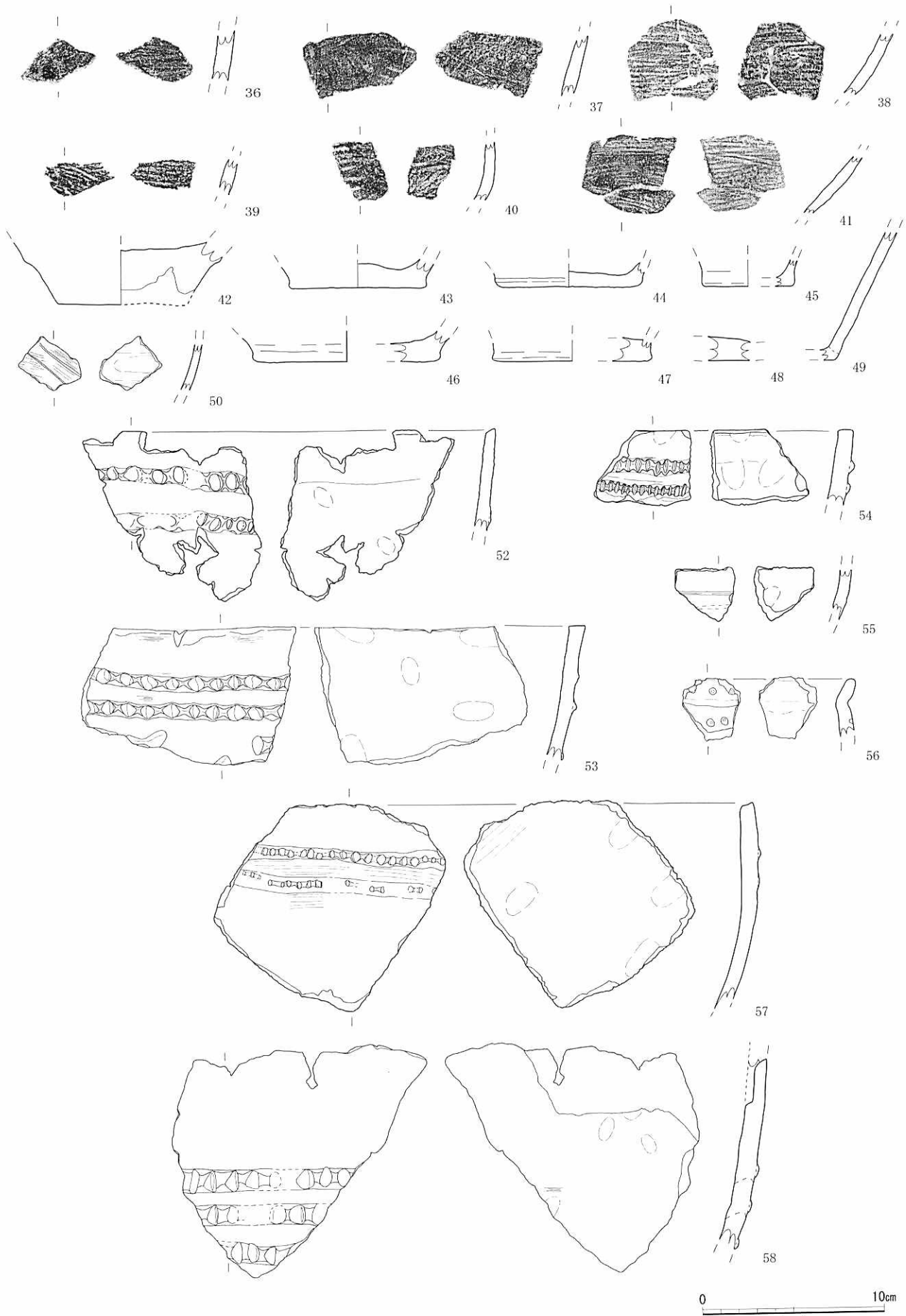
#### 〈B地点〉

**炭化物** B地点では16点出土した。なお、土器付着の炭化物、第5層出土の炭化物に関して放射性炭素年代測定法（AMS法）を用いて分析を行った。

**骨片** B地点では4点出土した。種の同定はできないが、うち1点は動物の歯と思われる。（安原）

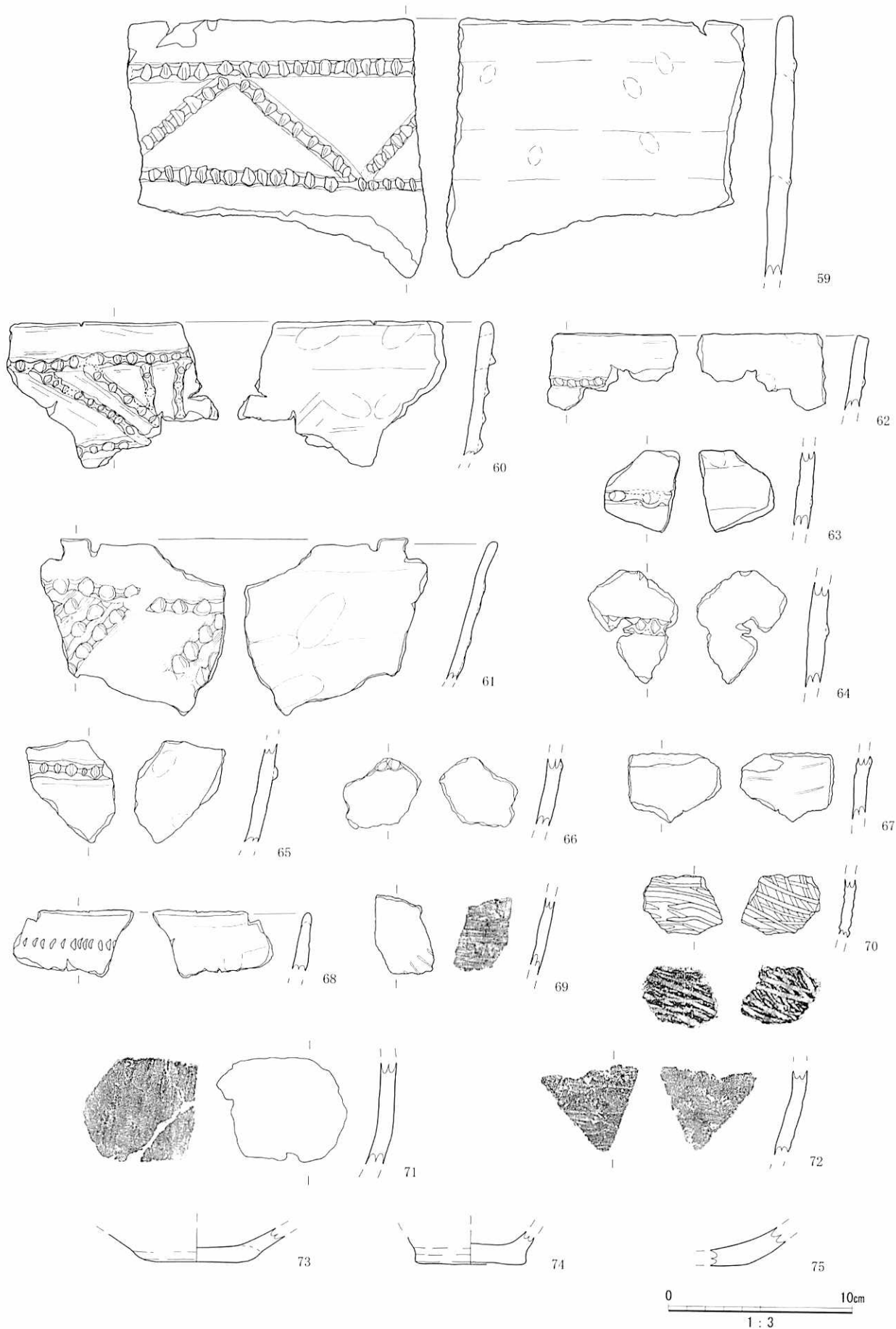


第 18 図 出土土器実測図 (A 地点)

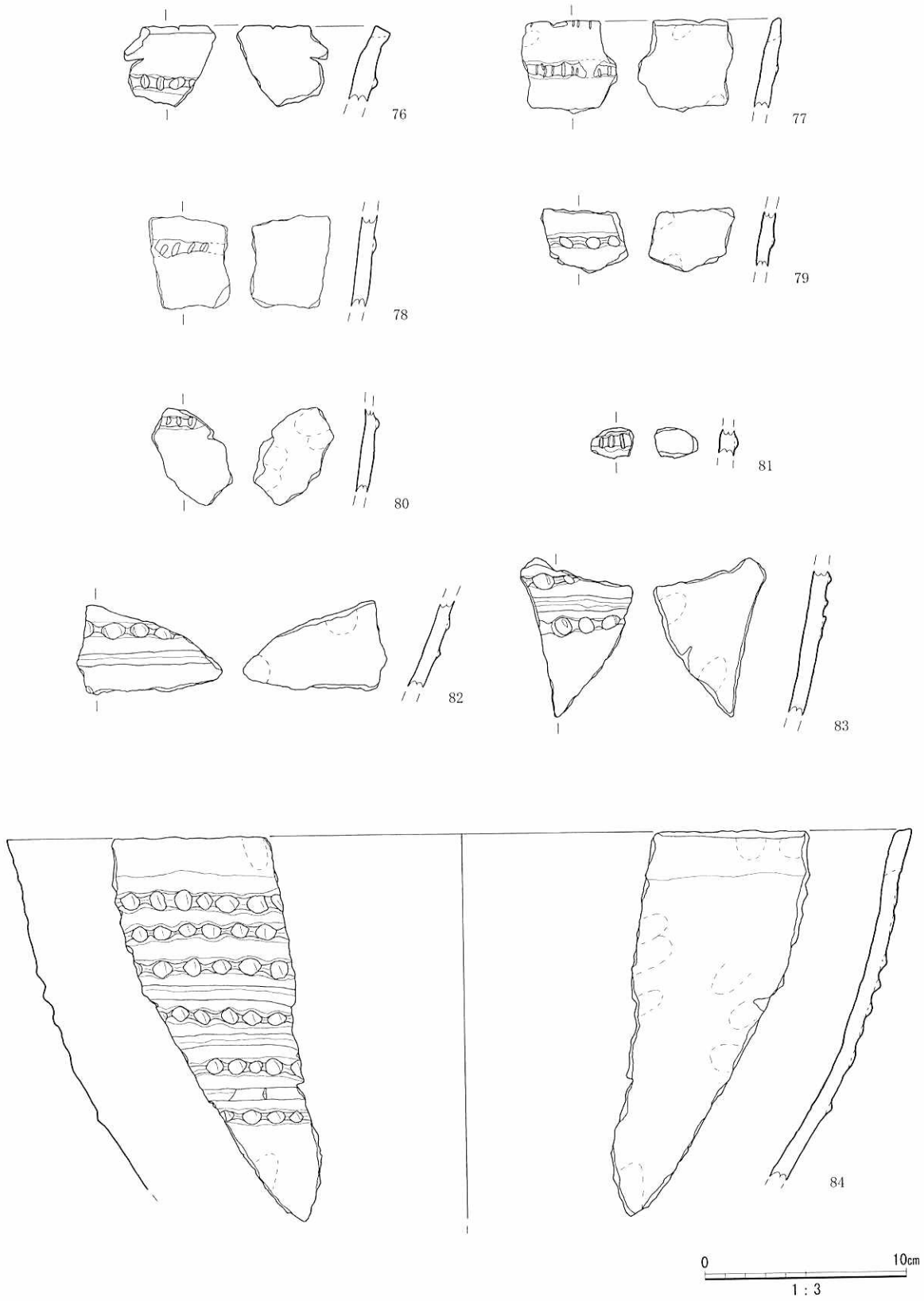


第19図 出土土器実測図 (A・B地点)





第 20 図 出土土器実測図 (B 地点)



第21図 出土土器実測図（第5次追加調査出土）

第2表 出土土器観察表 ( )は復元径

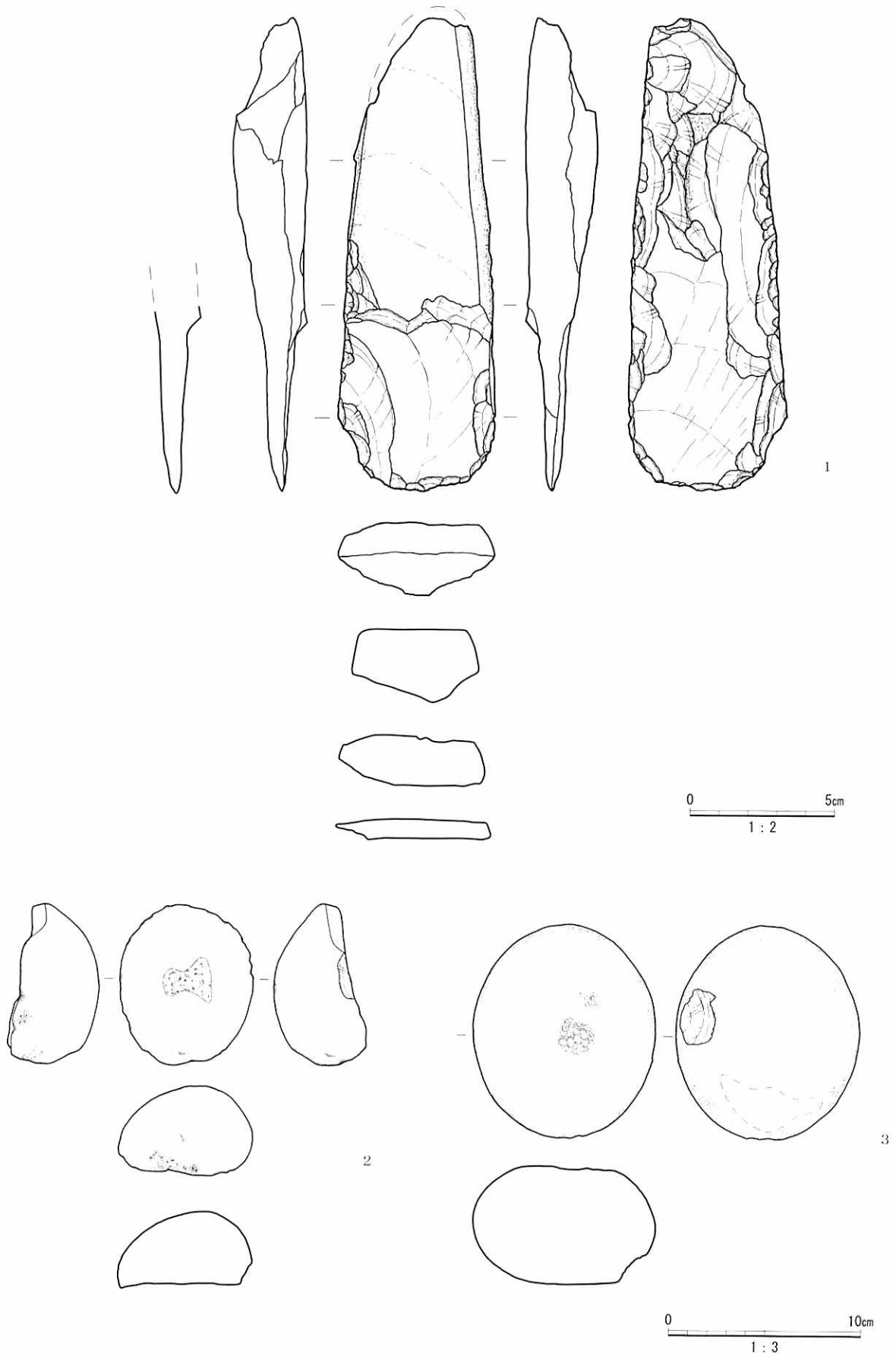
| No. | 器形 | 残存部位 | 法量 (cm) |       |    |    | 文様      | 色調                                   | 焼成   | 胎土  | 調査区 | 層    | 備考 |
|-----|----|------|---------|-------|----|----|---------|--------------------------------------|------|-----|-----|------|----|
|     |    |      | 口径      | 頸部径   | 底径 | 器高 |         |                                      |      |     |     |      |    |
| 1   | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆起線文    | 外：黒褐 (2.5YR3/2)<br>内：黒褐 (7.5YR3/1)   | 良好   | 密   | A地点 | 第9層  |    |
| 2   | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆帯文     | 外：橙 (5YR6/8)<br>内：灰褐 (7.5YR4/2)      | 良好   | 密   | A地点 | 第7層  |    |
| 3   | 壺  | 頸部   | —       | (8.2) | —  | —  | 刺突文・豆粒文 | 外：明赤褐色 (5YR5/6)<br>内：にぶい赤褐 (5YR5/4)  | 良好   | 緻密  | A地点 | 第7層  |    |
| 4   | 鉢  | 口縁部  | (26.0)  | —     | —  | —  | 刺突文     | 外：褐 (7.5YR4/3)<br>内：暗褐 (7.5YR3/3)    | 良好   | やや密 | A地点 | —    |    |
| 5   | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆起線文    | 外：暗褐 (7.5YR3/3)<br>内：褐 (7.5YR4/6)    | やや不良 | 密   | A地点 | 第8層  |    |
| 6   | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 沈線文     | 外：明赤褐 (5YR5/8)<br>内：にぶい黄褐 (10YR5/4)  | 良好   | 緻密  | A地点 | 第8層  |    |
| 7   | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 沈線文     | 外：明赤褐 (5YR5/6)<br>内：橙 (5YR6/6)       | 良好   | 緻密  | A地点 | 第8層  |    |
| 8   | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 沈線文     | 外：にぶい褐 (7.5YR5/3)<br>内：灰黄褐 (10YR4/2) | 良好   | 緻密  | A地点 | 第6層  |    |
| 9   | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 沈線文     | 外：にぶい褐 (7.5YR5/4)<br>内：橙 (5YR6/6)    | 良好   | 緻密  | A地点 | —    |    |
| 10  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 沈線文     | 外：橙 (5YR6/6)<br>内：明赤褐 (5YR5/6)       | 良好   | 密   | A地点 | 第7層  |    |
| 11  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 沈線文     | 外：褐 (7.5YR4/3)<br>内：明赤褐 (5YR5/6)     | 良好   | 緻密  | A地点 | 第8層  |    |
| 12  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆帯文     | 外：にぶい橙 (7.5YR6/4)<br>内：橙 (5YR6/6)    | 良好   | 密   | A地点 | —    |    |
| 13  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆帯文     | 外：明赤褐 (5YR5/6)<br>内：にぶい橙 (5YR6/4)    | 良好   | 緻密  | A地点 | 第10層 |    |
| 14  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆帯文・豆粒文 | 外：にぶい黄褐 (10YR6/3)<br>内：橙 (7.5YR6/6)  | 良好   | 密   | A地点 | 第9層  |    |
| 15  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆帯文     | 外：にぶい赤褐 (5YR5/3)<br>内：橙 (5YR6/6)     | 良好   | 緻密  | A地点 | —    |    |
| 16  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆帯文     | 外：黒褐 (5YR3/1)<br>内：にぶい赤褐 (5YR4/4)    | 良好   | 緻密  | A地点 | 第8層  |    |
| 17  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆帯文     | 外：にぶい褐 (7.5YR5/4)<br>内：橙 (7.5YR6/6)  | 良好   | 緻密  | A地点 | 第6層  |    |
| 18  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆帯文     | 外：にぶい褐 (7.5YR5/4)<br>内：橙 (7.5YR6/6)  | 良好   | 緻密  | A地点 | 第8層  |    |
| 19  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆帯文・沈線文 | 外：橙 (7.5YR6/6)<br>内：褐 (7.5YR4/4)     | 良好   | 緻密  | A地点 | 第8層  |    |
| 20  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆起線文    | 外：褐 (7.5YR4/3)<br>内：赤褐 (7.5YR4/6)    | 良好   | 緻密  | A地点 | —    |    |
| 21  | 不明 | 胴部   | —       | —     | —  | —  | 隆起線文    | 外：黒褐 (10YR3/2)<br>内：暗褐 (10YR3/4)     | 良好   | 緻密  | A地点 | 第8層  |    |

|    |    |     |   |   |       |          |  |    |    |     |     |         |
|----|----|-----|---|---|-------|----------|--|----|----|-----|-----|---------|
| 22 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | 隆起線文・刺突文 | 外：赤褐 (5YR4/8)<br>内：赤褐 (5YR4/6)         | 良好 | 緻密 | A地点 | 第8層 |         |
| 23 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | 沈線文      | 外：橙 (5YR6/6)<br>内：橙 (5YR6/4)           | 良好 | 密  | A地点 | —   |         |
| 24 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | 刺突文・沈線文  | 外：にぶい赤褐 (5YR4/4)<br>内：にぶい褐 (7.5YR5/4)  | 良好 | 緻密 | A地点 | 第8層 |         |
| 25 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | 刺突文・沈線文  | 外：にぶい黄褐色 (10YR5/3)<br>内：にぶい赤褐 (5YR5/4) | 良好 | 緻密 | A地点 | 第8層 |         |
| 26 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | 刺突文      | 外：橙 (7.5YR6/6)<br>内：にぶい赤褐 (5YR5/4)     | 良好 | 密  | A地点 | —   | 内面に強いナデ |
| 27 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：にぶい赤褐 (5YR5/3)<br>内：灰褐 (7.5YR4/2)    | 良好 | 密  | A地点 | —   | 内外面に条痕  |
| 28 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：にぶい赤褐 (5YR5/4)<br>内：にぶい橙 (5YR6/4)    | 良好 | 密  | A地点 | 第6層 | 外面に条痕   |
| 29 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：灰褐 (5YR4/2)<br>内：にぶい赤褐 (5YR4/3)      | 良好 | 緻密 | A地点 | —   | 外面に条痕   |
| 30 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：灰赤 (2.5YR6/2)<br>内：明赤褐 (5YR5/6)      | 良好 | 緻密 | A地点 | —   | 外面に条痕   |
| 31 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：にぶい黄橙 (10YR6/4)<br>内：赤褐 (7.5YR4/6)   | 良好 | 緻密 | A地点 | —   | 外面に条痕   |
| 32 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：褐 (7.5YR4/3)<br>内：橙 (5YR6/6)         | 良好 | 緻密 | A地点 | 第8層 | 外面に条痕   |
| 33 | 不明 | 口縁部 | — | — | —     | —        | 外：灰褐 (5YR4/2)<br>内：にぶい赤褐 (5YR4/3)      | 良好 | 緻密 | A地点 | —   | 外面に条痕   |
| 34 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：にぶい褐 (7.5YR5/4)<br>内：にぶい褐 (7.5YR6/4) | 良好 | 緻密 | A地点 | —   | 内面に条痕   |
| 35 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：明赤褐 (2.5YR5/6)<br>内：にぶい赤褐 (5YR4/4)   | 良好 | 緻密 | A地点 | —   | 内外面に条痕  |
| 36 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：にぶい褐 (7.5YR5/4)<br>内：黒褐 (10YR3/2)    | 良好 | 緻密 | A地点 | 第9層 | 内外面に条痕  |
| 37 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：にぶい黄褐 (10YR6/3)<br>内：にぶい赤褐 (5YR5/4)  | 良好 | 密  | A地点 | —   | 内外面に条痕  |
| 38 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：にぶい褐 (7.5YR5/4)<br>内：にぶい褐 (7.5YR5/3) | 良好 | 密  | A地点 | 第6層 | 内外面に条痕  |
| 39 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：褐灰 (7.5YR4/1)<br>内：灰黄褐 (10YR6/2)     | 良好 | 密  | A地点 | —   | 内外面に条痕  |
| 40 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：にぶい橙 (7.5YR6/4)<br>内：黄灰 (2.5YR4/1)   | 良好 | 緻密 | A地点 | —   | 内外面に条痕  |
| 41 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | —        | 外：にぶい橙 (5YR6/4)<br>内：橙 (5YR6/6)        | 良好 | 緻密 | A地点 | 第8層 | 内外面に条痕  |
| 42 | 不明 | 底部  | — | — | (7.0) | —        | 外：にぶい黄橙 (10YR7/4)<br>内：にぶい黄橙 (10YR7/3) | 良好 | 緻密 | A地点 | 第9層 |         |
| 43 | 不明 | 底部  | — | — | (7.6) | —        | 外：にぶい橙 (5YR6/4)<br>内：明赤褐 (5YR5/6)      | 良好 | 緻密 | A地点 | 第9層 |         |
| 44 | 不明 | 底部  | — | — | (7.7) | —        | 外：にぶい赤褐 (5YR5/4)<br>内：明赤褐 (2.6YR5/6)   | 良好 | 緻密 | A地点 | 第7層 |         |

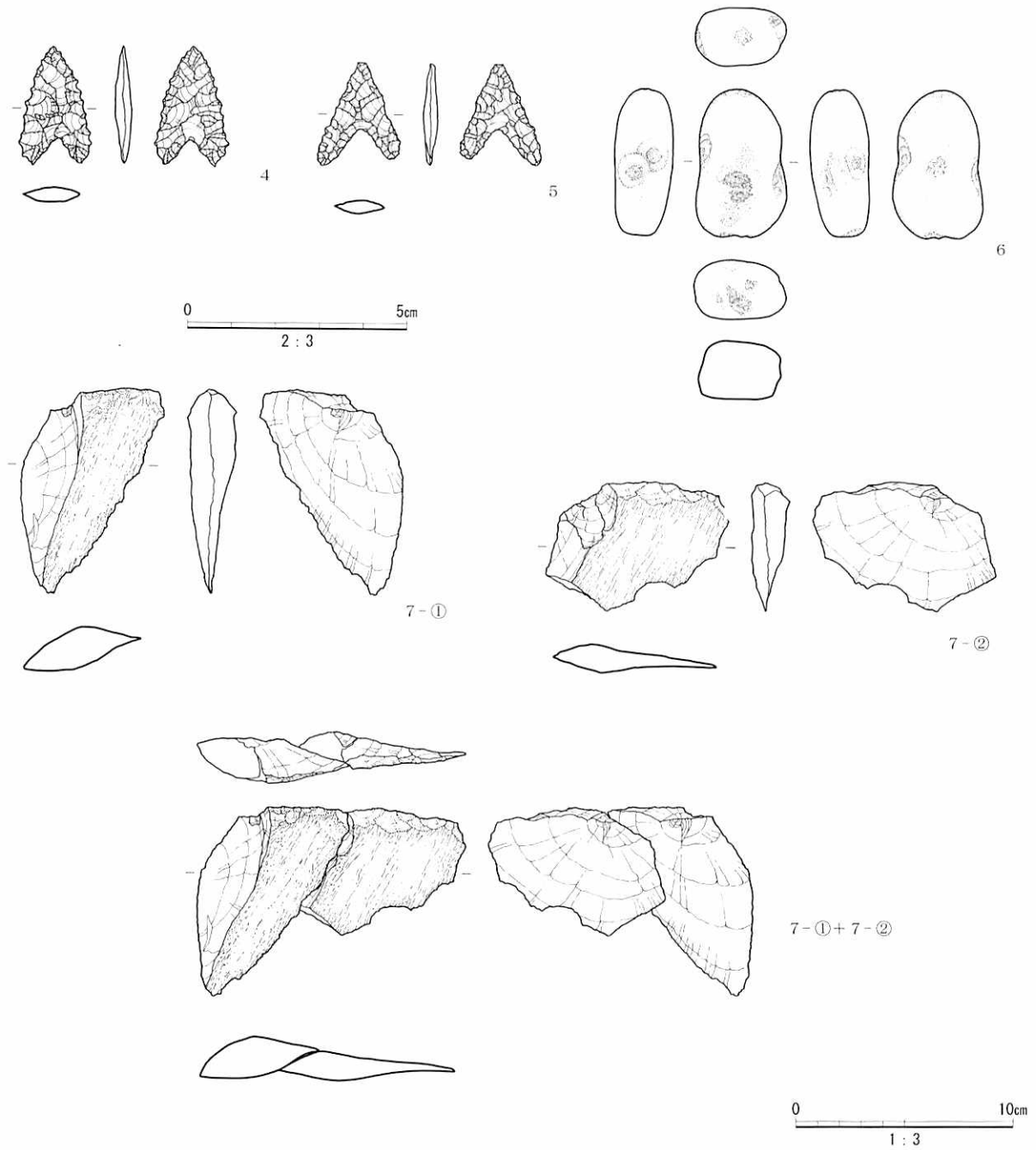
二 越高遺跡の調査

|    |    |     |   |   |       |   |          |                                       |      |      |     |      |           |
|----|----|-----|---|---|-------|---|----------|---------------------------------------|------|------|-----|------|-----------|
| 45 | 不明 | 底部  | — | — | (5.0) | — | —        | 外：赤 (10YR4/6)<br>内：褐 (7.5YR4/3)       | 良好   | 緻密   | A地点 | 第8層  | 内面に赤色顔料   |
| 46 | 不明 | 底部  | — | — | (9.8) | — | —        | 外：にぶい黄褐 (10YR5/4)<br>内：灰黄褐 (10YR4/2)  | やや良好 | 密    | A地点 | 第9層  |           |
| 47 | 不明 | 底部  | — | — | (9.0) | — | —        | 外：橙 (5YR6/6)<br>内：褐 (10YR4/4)         | 良好   | 緻密   | A地点 | 第9層  |           |
| 48 | 不明 | 底部  | — | — | —     | — | —        | 外：橙 (5YR6/6)<br>内：橙 (5YR6/6)          | 良好   | 緻密   | A地点 | 第10層 |           |
| 49 | 不明 | 底部  | — | — | —     | — | —        | 外：明赤褐 (5YR5/6)<br>内：明赤褐 (5YR5/6)      | 良好   | 密    | A地点 | —    |           |
| 50 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | — | 沈線文      | 外：橙 (7.5YR7/6)<br>内：橙 (7.5YR7/6)      | 良好   | 緻密   | A地点 | —    | 隆起文土器ではない |
| 51 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | — | —        | 外：明褐 (7.5YR5/6)<br>内：橙 (5YR6/6)       | 良好   | 緻密   | A地点 | 第8層  | 炉内出土      |
| 52 | 不明 | 口縁部 | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：暗赤褐 (5YR3/3)<br>内：灰褐 (5YR4/2)       | 良好   | 緻密   | B地点 | 第5層  |           |
| 53 | 不明 | 口縁部 | — | — | —     | — | 隆帯文・隆起線文 | 外：黄褐 (10YR5/6)<br>内：明黄褐 (10YR6/8)     | 良好   | 緻密   | B地点 | 第5層  |           |
| 54 | 不明 | 口縁部 | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：灰黄褐 (10YR4/2)<br>内：にぶい黄褐 (10YR5/4)  | 良好   | 緻密   | B地点 | 第5層  |           |
| 55 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | — | 隆起線文     | 外：黒褐 (10YR3/2)<br>内：にぶい黄橙 (10YR6/3)   | 良好   | 緻密   | B地点 | 第5層  |           |
| 56 | 不明 | 口縁部 | — | — | —     | — | 刺突文      | 外：褐灰 (10YR4/1)<br>内：黒 (7.5YR2/1)      | 不良   | 密    | B地点 | —    |           |
| 57 | 鉢  | 口縁部 | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：灰黄褐 (10YR4/2)<br>内：にぶい橙 (7.5YR6/4)  | 良好   | 緻密   | B地点 | —    |           |
| 58 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：灰褐 (5YR4/2)<br>内：明赤褐 (5YR5/6)       | 良好   | やや密  | B地点 | 第5層  |           |
| 59 | 不明 | 口縁部 | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：暗赤褐 (5YR3/2)<br>内：赤褐 (5YR4/6)       | 良好   | やや粗雑 | B地点 | 第5層  |           |
| 60 | 不明 | 口縁部 | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：にぶい黄褐 (10YR4/3)<br>内：橙 (7.5YR6/6)   | 良好   | 緻密   | B地点 | 第5層  |           |
| 61 | 不明 | 口縁部 | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：にぶい褐 (7.5YR5/4)<br>内：灰褐 (7.5YR4/2)  | 良好   | 緻密   | B地点 | —    |           |
| 62 | 不明 | 口縁部 | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：赤灰 (2.5YR4/1)<br>内：橙 (5YR6/6)       | 良好   | 緻密   | B地点 | —    |           |
| 63 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：褐 (7.5YR4/4)<br>内：黒褐 (7.5YR3/2)     | 良好   | 密    | B地点 | 第5層  |           |
| 64 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：にぶい赤褐 (5YR4/3)<br>内：にぶい褐 (7.5YR6/3) | 良好   | 密    | B地点 | 第5層  |           |
| 65 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：褐 (7.5YR4/3)<br>内：にぶい黄褐 (10YR4/3)   | 良好   | 緻密   | B地点 | —    |           |
| 66 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | — | 隆帯文      | 外：明赤褐 (5YR3/3)<br>内：黒褐 (10YR3/2)      | 不良   | 密    | B地点 | —    |           |
| 67 | 不明 | 胴部  | — | — | —     | — | 隆起線文     | 外：灰褐 (5YR4/2)<br>内：赤褐 (5YR4/6)        | 良好   | 緻密   | B地点 | —    |           |

|    |    |     |        |   |       |   |          |                                       |      |    |     |     |                     |
|----|----|-----|--------|---|-------|---|----------|---------------------------------------|------|----|-----|-----|---------------------|
| 68 | 不明 | 口縁部 | —      | — | —     | — | 刺突文      | 外：にぶい褐 (7.5YR5/4)<br>内：褐 (7.5YR4/4)   | 良好   | 緻密 | B地点 | —   |                     |
| 69 | 不明 | 胴部  | —      | — | —     | — | 沈線文      | 外：にぶい赤褐 (5YR5/4)<br>内：にぶい褐 (7.5YR5/4) | 良好   | 緻密 | B地点 | —   | 内面に条痕               |
| 70 | 不明 | 胴部  | —      | — | —     | — | —        | 外：黒褐 (2.5Y3/1)<br>内：暗灰黄 (2.5Y4/2)     | 良好   | 緻密 | B地点 | 第5層 | 内外面に条痕<br>隆起文土器ではない |
| 71 | 不明 | 胴部  | —      | — | —     | — | —        | 外：にぶい褐 (7.5YR6/3)<br>内：灰褐 (5YR5/2)    | 良好   | 緻密 | B地点 | 第5層 | 内外面に条痕              |
| 72 | 不明 | 胴部  | —      | — | —     | — | —        | 外：黒褐 (10YR3/2)<br>内：にぶい橙 (7.5YR6/4)   | 良好   | 緻密 | B地点 | —   | 内外面に条痕              |
| 73 | 不明 | 底部  | —      | — | (4.8) | — | —        | 外：橙 (7.5YR6/6)<br>内：明褐 (7.5YR5/6)     | 良好   | 緻密 | B地点 | 第5層 |                     |
| 74 | 不明 | 底部  | —      | — | (5.9) | — | —        | 外：にぶい赤褐 (5YR5/4)<br>内：灰褐 (5YR5/2)     | 良好   | 緻密 | B地点 | 第5層 |                     |
| 75 | 不明 | 底部  | —      | — | —     | — | —        | 外：浅黄橙 (10YR8/4)<br>内：浅黄橙 (10YR8/8)    | 良好   | 密  | B地点 | —   |                     |
| 76 | 不明 | 口縁部 | —      | — | —     | — | 隆帯文      | 外：赤褐 (2.5YR4/8)<br>内：赤褐 (2.5YR4/8)    | やや良好 | 密  | B地点 | 第5層 |                     |
| 77 | 不明 | 口縁部 | —      | — | —     | — | 隆帯文      | 外：赤褐 (5YR4/6)<br>内：にぶい赤褐 (5YR4/4)     | やや良好 | 緻密 | B地点 | 第5層 | 口縁部に刻目              |
| 78 | 不明 | 胴部  | —      | — | —     | — | 隆帯文      | 外：にぶい赤褐 (5YR4/4)<br>内：黒褐 (5YR2/1)     | 良好   | 緻密 | B地点 | 第5層 |                     |
| 79 | 不明 | 胴部  | —      | — | —     | — | 隆帯文      | 外：にぶい赤褐 (5YR4/3)<br>内：にぶい赤褐 (5YR4/4)  | 良好   | 緻密 | B地点 | 第5層 |                     |
| 80 | 不明 | 胴部  | —      | — | —     | — | 隆帯文      | 外：暗褐 (7.5YR3/4)<br>内：暗褐 (7.5YR3/3)    | 良好   | 緻密 | B地点 | 第5層 |                     |
| 81 | 不明 | 胴部  | —      | — | —     | — | 隆帯文      | 外：暗赤褐 (5YR3/4)<br>内：明赤褐 (5YR5/6)      | 良好   | 緻密 | B地点 | 第5層 |                     |
| 82 | 不明 | 胴部  | —      | — | —     | — | 隆帯文・隆起線文 | 外：にぶい赤褐 (2.5YR4/4)<br>内：黒褐 (5YR2/1)   | 良好   | 緻密 | B地点 | 第5層 | 84と同一個体             |
| 83 | 不明 | 胴部  | —      | — | —     | — | 隆帯文・隆起線文 | 外：暗褐色 (5YR3/2)<br>内：黒褐 (5YR2/1)       | 良好   | 緻密 | B地点 | 第5層 | 84と同一個体             |
| 84 | 鉢  | 口縁部 | (45.4) | — | —     | — | 隆帯文・隆起線文 | 外：赤褐 (5YR4/6)<br>内：明赤褐 (5YR5/6)       | 良好   | 密  | B地点 | 第5層 |                     |



第22図 出土石器実測図（A地点） 1：1/2，2・3：1/3



第23図 出土石器実測図 (B地点) 4・5 : 2/3, その他 : 1/3

第3表 出土石器観察表

| No.     | 器種   | 石材  | 法量      |        |         |        | 調査区 | 層位  | 備考         |
|---------|------|-----|---------|--------|---------|--------|-----|-----|------------|
|         |      |     | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重さ (g) |     |     |            |
| 1       | 石斧   | 頁岩  | 16.3    | 5.5    | 2.5     | 225.7  | A地点 | 第8層 | 基部と表面刃部が欠損 |
| 2       | 敲石   | 砂岩  | 8.5     | 7.0    | 3.9     | 300.8  | A地点 | —   | 石器の一部が欠損   |
| 3       | くぼみ石 | 砂岩  | 11.2    | 9.6    | 6.4     | 917.8  | A地点 | —   |            |
| 4       | 石鏃   | 黒曜石 | 2.8     | 1.7    | 0.3     | 1.0    | B地点 | 第5層 |            |
| 5       | 石鏃   | 黒曜石 | 2.4     | 1.9    | 0.3     | 0.9    | B地点 | 第5層 | 先端部欠損      |
| 6       | 敲石   | 砂岩  | 6.9     | 4.3    | 2.7     | 120.5  | B地点 | 第5層 |            |
| 7-①     | 剥片   | 頁岩  | 9.5     | 6.6    | 1.8     | 77.7   | B地点 | 第5層 |            |
| 7-②     | 剥片   | 頁岩  | 6.0     | 8.6    | 2.3     | 52.6   | B地点 | 第5層 |            |
| 7-①+7-② | 剥片   | 頁岩  | 8.8     | 12.4   | 1.9     | 130.3  | B地点 | 第5層 |            |